

第3章 瀬戸市の関連文化財群

1 関連文化財群の設定の考え方

(1) 関連文化財群の捉え方・考え方

瀬戸市の歴史文化の最大の特色は「やきもの」です。「せともの」がやきものの代名詞として知られているように、瀬戸市のやきものづくりは単に地場産業として捉えるだけではなく、国内外における陶磁器文化を構成する重要な要素であると捉える必要があります。こうした「せともの」のブランド力が成立するに至った歴史や文化を示す文化財群は、多種多様なもので、それらは複数のストーリーにより、まとめることができます。また、独自性の高い歴史の背景には、市域の3分の2を山林が占めることをはじめとする瀬戸市の地理的特徴や、自然や地域の歴史文化などがあり、瀬戸市の風土を示す文化財群が重要な要素となっています。

そこで、メインテーマであるやきものに関わる文化財群を「窯」「人物」「街」「技術」「芸術」などをキーワードとして抽出します。また「他地域との交流」「自然」「地域(祭りなど)」をサブテーマとして文化財群の抽出を行います。

(2) 対象とする文化財

- ①指定文化財だけでなく未指定のものも対象とします。
- ②従来の文化財の枠にとらわれず、市民が愛着を感じ、人に伝えたい、残しておきたいと感じる事物の内、現存し、起源・変遷等がある程度把握できるものも対象とします。
- ③現存しないものや無形のもので、十分な資料・学術的根拠に基づき、復元・複写等されたもの、それを記録した媒体等も対象とします。

(3) 関連文化財群のテーマ案

		ストーリー
メイン テーマ	やきもの	①「窯」：1000年以上の歴史を積み重ねてきたやきものづくり
		②「人物」：陶祖、磁祖、織田信長、尾張徳川家らによって築かれた礎
		③「街」：“せともの”の発展とともに形成された「陶都瀬戸」
		④「技術」：世界にはばたくやきもの高い技術
		⑤「芸術」：芸術性あふれるクリエイティブ(創造的)なまち
サブ テーマ	地理的要因	⑥「交流」：尾張・三河・美濃～三国の境であるまち
	自然	⑦「自然」：瀬戸特有の自然環境・自然との共生
	地域	⑧「祭り」：地域とともに継承されてきた伝統芸能や祭り・習慣

■歴史文化ストーリーの素材

瀬戸市における歴史文化ストーリーの素材

瀬戸市の歴史文化の中心となるやきものをはじめ、自然や民俗など多様な要素が瀬戸にはあります。ここでは、ストーリーの素材となる8つの案を提示させていただきます。これらを読んで、その評価をアンケートにお答えください。

①「窯」：1000年以上の歴史を積み重ねてきたやきものづくり

- 世界的にも良質な陶土をはじめとした原料によって、陶器や磁器など多種多様なやきものを生み出してきた産地は、国内外において瀬戸以外にほとんどない
- 平安時代の窯（穴）窯から現代のガス窯まであらゆる時代の窯が存在し、各時代のすべての移り変わりを見ることができる
- 各時代をリードしたもののづくりの現場がある（工場など）



陶土・桂砂採掘場(瀬戸キャニオン)



小長曾陶器窯跡

②「人物」：陶祖、磁祖、織田信長、徳川義直らによって築かれた礎

- 陶祖：加藤四郎左衛門景正(藤四郎)による「瀬戸焼」の誕生伝説
- 磁祖：加藤民吉による新たな磁器生産の発展と、尾張藩との連携
- 織田信長が茶陶により「せともの」の価値を高め、そして徳川義直ら尾張藩主の保護のもとやきもののブランド「瀬戸」が成長した



六角陶碑



源敬公(徳川義直) 簡

1

③「街」：「せともの」の発展とともに形成された「陶都瀬戸」

- 近代のやきもの技術の発展、大量生産、流通の拡大などによって、「陶都」らしい景観が生み出された
- 瀬戸ではやきものに関係するロクロ師や絵付師、焼き手など多くの職人が働き、瀬戸ならではの職人文化や五目飯(ゴモ)などの特色ある食文化がはぐくまれた



旧山紫商店



窯垣の小径

④「技術」：世界にはばたくやきもの高い技術力

- イノベーション(技術革新)により「せともの」は飲食器からノベルティ(陶磁器製の置物など)、硝子(電柱や電線に使用する部品)、ファインセラミックスなど新たな産業へ進化を続けてきた
- 高い技術力や日本らしさを活かした作品が数多く輸出され、アール・ヌーヴォーやアール・デコへも影響を与えとともに、世界に受け入れられた



セトノベルティ



磁器製ローゼット(硝子)

2

⑤「芸術」：芸術性あふれるクリエイティブ(創造的)なまち

- やきもの奥深い伝統を背景として、陶芸家をはじめとする様々な芸術家をはぐくみ互いに交流し、高めあえるまち
- 陶壁や陶磁器を用いた構、パブリックアート(公共空間に設置された芸術作品)など様々な芸術作品がまちに点在している



加藤九郎作陶壁
(文化センター文化ホール)



北川民次作陶壁(図書館)

⑦「自然」：瀬戸特有の自然環境・自然との共生

- 豊かな里山が残した「生きた化石」オオサンショウウオ
- 特有の地質や地形による特徴的な植生(マメナシ、シデコブシ、ヒトツバタゴなど)
- 自貢石、石碯、岩屋堂など『尾張名所図会』にも紹介された名勝地



オオサンショウウオ



マメナシ

⑥「交流」：尾張・三河・美濃～三国の境であるまち

- 三国を往来する街道ができ、戦国時代に武家が覇権を争った城館や人馬が往来する拠点としての町場が形成された
- この地を好んだ初代尾張藩主徳川義直の廟所が定光寺につくれ、殿様街道を通過して歴代藩主が参内した
- 尾張東部域一帯を治めた水野代官所により名古屋城下と直接つながる



今村城跡



殿様街道

3

⑧「祭り」：地域とともに継承されてきた伝統芸能や祭り・習慣

- 地域内外の交流がみられる献馬行事・嘗酒祭り
- 地域の人々が集う品野祇園祭、お薬師あめんぼう祭り、太子祭り
- 産業祭であるせともの祭、せと陶祖まつり



嘗酒祭り(菱野のおでく)



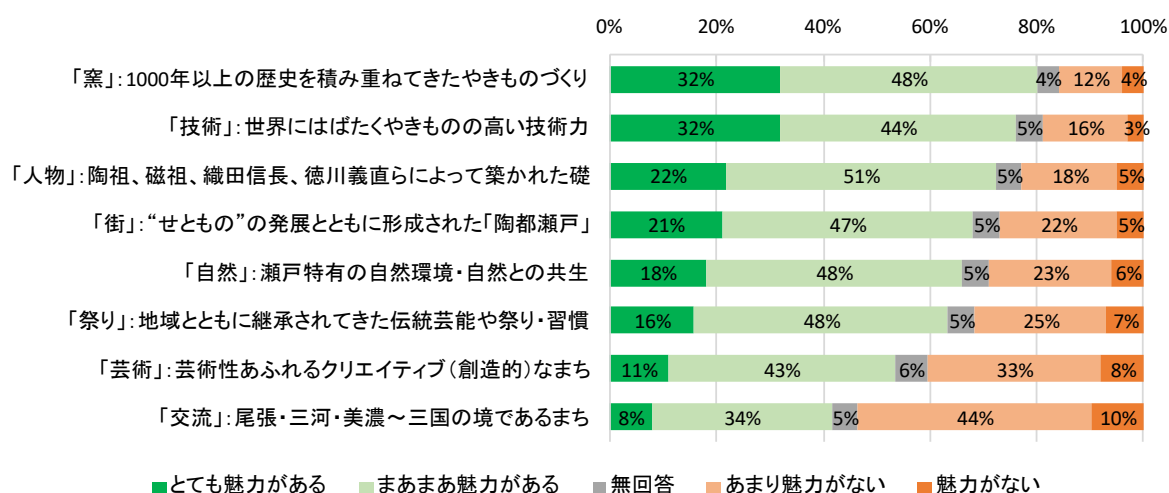
品野祇園祭

4

(4) 市民アンケートによる市民の関心の把握

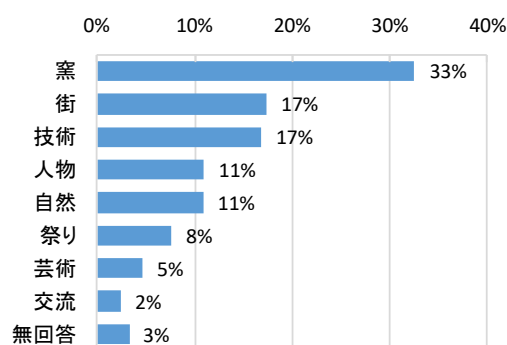
「瀬戸市の歴史文化に関するアンケート」（平成28年7月実施、参考資料131～190ページを参照）において、市民がどのような歴史文化ストーリーに関心を持っているかを把握するため、8つの歴史文化ストーリーの素材を提示し、その魅力度を問いました。

「窯」「技術」といったやきものに直接関わるストーリーに魅力を感じる人が多く、「人物」「街」「自然」「祭り」「芸術」についても、半数以上の人魅力を感じています。一方、「交流」については、魅力がないと感じる人の方が多くなっています。



これらのストーリーの中で、市外の人にPRしたいものとしては、「窯」が33%で最も多く、次いで「街」「技術」がそれぞれ17%となっています。

性別・年齢別・居住歴別にみると、いずれも「窯」が最も高いのは同じですが、2位以下が異なります。若い層やUターン層は、「技術」よりも「街」に魅力を感じているようです。



■性別・年代別・居住歴別の市外の人にPRしたいもの

	1 位	2 位	3 位	4 位
全体	「窯」 33%	「街」 17%	「技術」 17%	「人物」 11%
男性	「窯」 32%	「街」 18%	「技術」 16%	「人物」 12%
女性	「窯」 34%	「技術」 18%	「街」 16%	「自然」 11%
30 歳未満	「窯」 25%	「街」 18%	「技術」 16%	「自然」 16%
30 歳代	「窯」 36%	「街」 18%	「自然」 13%	「人物」 11%
40 歳代	「窯」 31%	「街」 21%	「技術」 14%	「自然」 11%
50 歳代	「窯」 28%	「技術」 19%	「街」 18%	「自然」 12%
60 歳代	「窯」 34%	「技術」 24%	「街」 15%	「自然」 10%
70 歳以上	「窯」 37%	「街」 16%	「技術」 15%	「人物」 15%
定住層	「窯」 30%	「技術」 20%	「街」 19%	「人物」 10%
転入層	「窯」 34%	「技術」 16%	「街」 15%	「自然」 13%
Uターン層	「窯」 36%	「街」 22%	「技術」 16%	「人物」 15%

ストーリーに関しては、「せとものを人物から街からと関連付けてまとめてありよかった。知らないものばかりで新たな瀬戸市の歴史文化を確認することができた。」「興味深い内容でもっと瀬戸市のことを知りたいと思った。市外の友人にも誇れる瀬戸市を案内できそうです。」「簡潔で興味関心を持たせ、『行きたい、見たい、やってみたい』と思えるようなストーリーにしてみらいたい。」といった期待の声がありました。

また、ストーリーの内容に関しては、以下のような意見があげられました。わかりやすく、ドラマ性を感じ、インパクトのあるストーリーを求める声が多く出されました。

項目	意 見
全般	・ ほぼ網羅されているので、それぞれの内容の充実が重要。 ・ それぞれの強味を合体させてストーリーを構成するのはどうか。 ・ 堅苦しい教育的なものではなく、謎の人物を追いかけてながら瀬戸市内を駆け巡るラブサスペンスを希望。 ・ 単調でおもしろみがない。もう少しインパクトのある感じにした方がよい。 ・ 集中的にやった方が効果があると思う。 ・ 新しい未来への進展や構想が貧弱だと思う。 ・ 陶にこだわりすぎず、自然と文化財をリンクさせて3つぐらいに絞ったストーリーを作り、回遊や再訪したいと思わせる仕掛けが必要。 ・ 楽しさが伝わってこない。子どもが読めるようなものも作成してほしい。 ・ 食文化と組み合わせてせとものを発信できるとよい。
窯	・ 「陶磁器」＝「せともの」にした人々の思いや背景など、ドラマ性を打ちだしたストーリーにするのはどうか。 ・ 「やきもの」の歴史を細切れにしてとりあげるのではなく、総合的なストーリーとして描くべき。
人物	・ 地名度の高いキーワード「せともの」と「織田信長」をからめるのはどうか。
街	・ 生活の中に陶器が生きづいているのが素敵なところである。
技術	・ 高い技術力を客観的に理解してもらえるストーリーづくりが必要。
芸術	・ 歴史や伝統は変えることができないので、これから「芸術性あふれるクルエイティブ(創造的)なまち」にしていくしかない。
交流	・ 三国の境の地だからこそ生まれて来た文化の魅力を伝えるべき。
自然	・ 歴史ある猿投山を愛知の高野山的にPRしてはどうか。
祭り	・ せともの祭を全面に押し出すのはどうか。

(5) 市民参加によるストーリーづくり

市民の感性による魅力的なストーリーづくりと構想推進にあたっての協働の下地づくりをねらいとして2回の市民ワークショップ(平成28年7月実施、15ページを参照)を実施しました。

初回は先の市民アンケートで提示した8つのテーマに関し、関連する文化財・文化遺産を出し合い、その魅力について語りました。2回目は参加者の希望を踏まえ、3グループに分かれそれぞれ2つのテーマについて、地図に関連する文化財の位置を示しながら、魅力的な歴史文化ストーリーについて意見交換を行いました。1つのストーリーとしてまとめることまではできませんでしたが、以下のような小ストーリーが出されました。

テーマ	小ストーリー
窯	・ 平安期から鎌倉期にかけての、やきものがつくられた場所の変遷。場所が移動してきた理由は各地で材料を取りつくしてしまったことが原因。 ・ 鎌倉期に施釉陶器をつくっていたのは六古窯を含め日本全国見渡しても瀬戸だけ。 ・ 古瀬戸は猿投の山茶碗よりも高級品でランクが上である。瀬戸のやきものには鎌倉幕府御用達の茶器もあった。
人物	・ 戦国武将と文化面での関わりが強いのが瀬戸の特徴。 ・ 瀬戸と信長の関わり。戦乱を避けるため陶工を美濃に連れて行ったといわれている(瀬戸山離散)が、信長は茶陶を広め、楽市楽座を起こしたり、朱印状を出したりするなど、やきものを庇護し、価値を高め、発展させた。 ・ 徳川義直による瀬戸焼の復興
街	・ 窯屋が中心となって産業を振興し、街も造ってきた。 ・ 街を大きくした原動力は洞。その後、北新谷・南新谷、新開地など西へと街が広がっていった。宝泉寺界隈には寺子屋や遊郭もあり、非常に栄えていた。宝泉寺は中心的な役割を担っていた。もっと表に出したほうがよい。 ・ 北新谷あたりも重要な場所。窯屋が集中し、産業が発展する中で、その資力を持って瀬戸線を敷くなど街をつくっていった。
技術	・ 資源、権力者、地形などの要素が複合して技術を革新。 ・ 良質な原料が取れた自然や地理・環境面。すべてがここにあったことがやきものの起り。 ・ どの時代も権力者がいたことも大きい。権力者のもとに仕事起きた。 ・ 手仕事の需要が増えることで分業化になり、量をつくることで技術が高まった。
芸術	・ やきものによる芸術作品は、窯業の新しい部門としてガラスやセラミックを積極的に導入したことで多様化した。 ・ まちの中でいろいろな芸術を融合して人材を育てようという思いを持っている。
交流	・ 戦国期における織田氏と今川・松平氏との攻防。 ・ 戦乱の多かった品野と力のある水野氏が治め戦乱の少なかった水野。 ・ 瀬戸はやきものが中心で、城については語られることがなかったが、多くの城がある。武田信玄勢が進出したと伝えられる物見山や利用したとされる塔山城もある。別の魅力として推していったらどうか。
自然	・ オオサンショウウオは日本で一番東の生息地。きれいな水があるから生息している。町民一体で水質保全を続けてきた努力がある。 ・ 日本三大禿山の一つであったが、その禿山から回復させていることがすごい。 ・ 定光寺公園は日本の公園の父といわれる本多静六の設計である。
祭り	・ 幡山・今村地区で行われる猿投合宿のなごりである警固祭り。 ・ 国道を通行止めにして行われる品野祇園祭。 ・ 地域ごとに独自の祭りがある。広域的な観光客を呼ぶような祭りではないが、瀬戸市民に対しては瀬戸市内の特色ある祭りとして知ってもらうことが必要。

2 関連文化財群の設定(ストーリーの設定)

市民アンケートにおいて、市外の人にPRしたいものとして「窯」がトップにあげられましたが、市民ワークショップによる意見交換の状況から、「窯」というテーマは「人物」や「技術」とも深い関連を持っており、ストーリーの組み立てが難しいことがわかりました。むしろ、瀬戸市のやきものの特徴である「陶器」「磁器」「新技術」を時代区分とともに整理した方がストーリーもわかりやすいと考えられます。

そこで当初のテーマ案を以下のように組み換え、関連文化財群を設定することとします。

組換 当初		やきもの			④創造	⑤街	⑥交流	⑦自然	⑧祭り
		①陶器	②磁器	③新技術					
やきもの	窯	○	○	○	○				
	人物	○	○						
	街					○			
	技術	○	○	○	○				
	芸術				○				
	交流						○		
	自然							○	
	祭り								○

関連文化財群と時代との関係を整理すると、以下のとおりです。

	やきもの			④創造	⑤街	⑥交流	⑦自然	⑧祭り
	①陶器	②磁器	③新技術					
～弥生時代								
古墳時代								
奈良期								
平安期								
鎌倉期								
室町期								
戦国期								
江戸期								
明治期								
大正期								
昭和期								
平成期								

①陶器のふるさと ～せともの誕生～

千年以上も連綿とやきものづくりを続けているまち「瀬戸」。このような産地は世界的にみても瀬戸だけであり、「せともの」はやきものの代名詞となりました。千年以上の歴史を誇る瀬戸市のやきものは、日本文化の歴史を映し出す鏡でもあるのです。

②せともの産業革命 ～磁器生産の開始と発展～

19世紀初頭に開始された磁器生産は、またたく間に近世瀬戸村に広がり、文政年間(1818～1830)末期には陶器(本業焼)生産を凌駕していきます。この磁器(新製焼、染付焼)生産開始により、瀬戸では陶器と磁器の両方を生産する世界でも稀有な産地として確立されるとともに、瀬戸でつくれないやきものはないといわれるまでの産地に成長していきました。

③世界に羽ばたいたせともの ～Made in Seto～

瀬戸では、日本らしさを活かしながら、永い歴史と伝統に裏打ちされた高い技術力により、世界で高い評価を受けたやきものが生み出されました。それらは海外の文化や芸術に影響を与えたり、日本文化を海外に発信するなどの大きな役割を果たしています。

④やきもののまちから Creative Cityへ ～伝統と革新～

瀬戸では、千年もの永きにわたり時代の流行を敏感に感じ取りながら、そしてイノベーション(技術革新)を繰り返し、多彩なやきものを生み出してきました。その伝統や技術は今日まで受け継がれ、やきものの奥深い伝統を背景として、陶芸家をはじめとする様々な芸術家をはぐくみ互いに交流し、高めあえるまちとなっています。

⑤まちとなりわい ～職人文化とやきものが息づくまち～

陶磁器生産の隆盛により、瀬戸には多くの人が集まり、食やまちの風景にも独特の職人文化をみることができます。窯道具を積み上げて造られた「窯垣」のほか、旧山繁商店をはじめとした多くのやきもの関係の建築物などによって「陶都」らしい風景がかたちづくられています。まちの中に職人文化とやきものが息づいているのが瀬戸のまちの特徴といえます。

⑥街道と交流 ～尾張・三河・美濃の三国の境～

旧尾張国の北東端に位置し、三河・美濃の国境に接する瀬戸では、古くから様々な人・モノの交流が生まれました。戦国期に頻繁に争いが繰り返されたのは、それだけ瀬戸市の地が重要であったことを示しています。

⑦自然との共生 ～豊かな自然とその再生～

自然との共生の中でやきものが誕生し、尾張名所図会において自然の造形である珍しい風景が紹介されている瀬戸。現在も国の天然記念物オオサンショウウオが生息する豊かな自然がみられますが、江戸後期から明治にかけては禿山が広がり、土砂流出も頻発するなど自然と対立する時代もありました。

⑧地域と祭り ～伝統の継承と人々の交流～

瀬戸市は、江戸期の18の村々が合併してできたまちで、それぞれの地域ごとに多様な特色のある祭りが受け継がれています。祭りに向かって地域ごとに準備を進める中で、地域の人々が交流し、祭りのしきたりを伝承しています。祭り当日の熱狂は地域の一体感を高め、地域への誇りや愛着を生み出しています。

(1) 陶器のふるさと～せとものの誕生～

千年以上も連綿とやきものづくりを続けているまち「瀬戸」。このような産地は世界的にみても瀬戸だけであり、「せともの」はやきものの代名詞となりました。千年以上の歴史を誇る瀬戸市のやきものは、日本文化の歴史を映し出す鏡でもあるのです。

陶祖藤四郎と瀬戸の土

瀬戸窯では、10 世紀中ごろに市域南部の広久手第 30 号窯で操業が開始されて以来、現在に至るまでやきものがつくり続けられることとなりますが、瀬戸市のやきものを語る上で欠かすことができないのが、陶彦社に祀られている陶祖である加藤四郎左衛門景正(藤四郎)です。

藤四郎は曹洞宗の開祖道元禅師にしたがって中国に渡り、やきものの技法を学んで帰国。製陶に適した土を求めて全国を回中、瀬戸でよい土を発見したという伝説が残っています。慶応 3 年(1867)には陶祖を顕彰する六角陶碑が建設され、安政 2 年(1855)に陶祖 650 年祭、明治 43 年(1910)に春慶翁 700 年祭などが行われました。また、昭和 37 年(1962)から現在まで藤四郎の遺徳を偲ぶ祭りとして「せと陶祖まつり」が開催されており、市民にとって陶祖藤四郎は精神的なシンボルともいえる存在であるといえます。

良質な陶土・珪砂を採掘する現場は「瀬戸キャニオン」とも呼ばれています。その姿は歴史の重みと自然との共生を感じさせ、見る人を魅了する圧巻の風景です。



陶土・珪砂採掘場

やきもののブランド化

12 世紀の終わり頃に誕生した「古瀬戸」は、中世の日本における唯一の施釉陶器として流通し、特に鎌倉期には、上級武士をはじめとした都市在住層に集中的に供給されました。その後、46 ページに示したように赤津地区を中心として生産された「古瀬戸」は全国各地に広がり、国産高級施釉陶器としてのブランドが確立されました。

そして織田信長はやきものの地位をさらに高めるためにやきものをブランド化するとともに、陶器産業の保護政策を行いました。戦国期後半には、瀬戸焼の生産拠点が美濃へと移動し、「瀬戸山離散」とも呼ばれましたが、それは信長の美濃への進出に伴う瀬戸焼の生産拠点の移動であり、「せともの」が信長にとって領国内の商業振興に欠かせないものであったと考えられます。瀬戸市内には、瀬戸の窯業を含む商工業を保護するため、商人の往来や商業取引を取り決めた「織田信長の制札」も残されています。また、畿内の豪商の茶会記には、瀬戸や美濃で焼かれた茶陶の名称について、天正年間(1573～1592)の後半を境に集荷地を示す「伊勢」から「瀬戸」に転換しており、「瀬戸」がやきもの生産地のブランドとして認識されるようになったと考えられます。



古瀬戸瓶子

江戸期になると、徳川家康の意向を受けた尾張徳川家によって陶工が呼び戻され、窯業生産が再開されます。小長曾陶器窯跡や瓶子陶器窯跡では藩士の茶陶の注文生産などが行われ、穴田古窯跡群では、初代尾張藩主徳川義直の廟所である定光寺源敬公廟にある焼香殿や宝物殿の敷瓦が生産されるなど、尾張藩と瀬戸窯とは強い結びつきがありました。

関連文化財群を構成する文化遺産

小テーマ	文化遺産名
陶祖藤四郎と瀬戸の土	
瀬戸窯の黎明ー瀬戸窯最古の窯跡ー	広久手第 30 号窯跡(市指定)
陶祖藤四郎伝説	陶製狛犬(国指定)、六角陶碑(市指定)、 陶祖公園、せと陶祖まつり
瀬戸窯業を支えた粘土ー名勝となった鉱山ー	陶土・珪砂採掘場
やきもののブランド化	
陶器産業の保護	織田信長の制札(市指定)、窯屋証文(市指定)
瀬戸焼の祖ー古瀬戸名品ー	灰釉瓶子一對(市指定)、鉄釉巴文瓶子(県指定)
尾張藩とのつながり	小長曾陶器窯跡(国指定)、瓶子陶器窯跡(国指定)、穴田古窯跡群 源敬公廟焼香殿敷瓦
近世瀬戸村窯業の最盛期の象徴ー巨大な連房式登窯ー	水野代官所跡、御林方奉行所跡
江戸期名工の逸品	夕日 4 号窯跡(陶祖公園)、桂蔵窯跡
江戸・明治期の陶製工芸品	御深井釉木瓜形水盤(県指定)、御深井釉唐草文双耳水甕(県指定)
	六角陶碑(市指定)、志野焼燈籠(市指定)、織部燈籠(市指定)



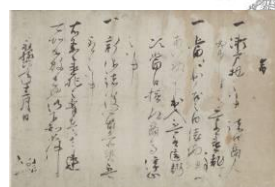
せと陶祖まつり

源敬公廟焼香殿床面
(鉄釉錆絵敷瓦)

陶祖公園



陶製狛犬



織田信長の制札



小長曾陶器窯跡



広久手第 30 号窯跡



● 陶祖藤四郎と瀬戸の土
● やきもののブランド化

(2) せとものの産業革命 ～磁器生産の開始と発展～

19世紀初頭に開始された磁器生産は、またたく間に近世瀬戸に広がり、文政年間(1818～1830)末期には陶器(本業焼^{ほんぎようやき})生産を凌駕していきます。この磁器(新製焼^{しんせいやき}、染付焼^{そめつけやき})生産開始により、瀬戸では陶器と磁器の両方を生産する世界でも稀有な産地として確立されるとともに、瀬戸でつくれないやきものはないといわれるまでの産地に成長していきました。

磁祖民吉が広げた磁器生産

瀬戸の窯元の二男として生まれ、家業の窯業を継げずにいた加藤民吉が磁器の生産技法習得のために熊本県の天草や長崎県の佐々でおおよそ3年間の修業をつみ、文化4年(1807)に瀬戸へ戻り、磁器生産に関わる土の生成法から焼成法に至る技術や工夫を伝え、それまで試作的であった磁器生産の技術が向上し、本業焼から新製焼への転業が相次ぐとともに、二男・三男による開業がすすむことにより、瀬戸の磁器は飛躍的な発展をみせます。



加藤民吉像

民吉の九州修業は、尾張藩及び瀬戸の窯業界挙げての支援や、津金文左衛門や加藤唐左衛門など多くの人の協力、加えて曹洞宗のネットワークの活用など、新たな発展に向けて一致団結した結果として成し遂げられたものでした。また、この頃の製品は、尾張藩による蔵元制度のもと、御蔵会所^{おくらかいしよ}から藩の御蔵に送られた後、さらに江戸・大坂・京都の三都などへ流通し、瀬戸の磁器製品の流通量は、まもなく肥前磁器を凌いだといわれています。こうして瀬戸の磁器製品が日本全国に流通していくこととなり、「せともの」が全国区のやきものとして確立されていきました。

瀬戸の産業革命

江戸後期から近代にかけて、瀬戸窯では生産技術の改良による品質や生産力の向上が図られていきます。

特に明治中期以降には、銅板転写技術の導入や、電気の使用開始に伴う動力機械の使用など、大量生産を行うための環境を整えていきます。加えて、江戸後期以降導入された丸窯や江戸期末に登場した古窯といった薪を使う窯炉から、大正期には石炭窯が、昭和になると重油窯やガス窯が登場するなど、瀬戸窯では時代の流れとともにその時代に即した新たな窯炉を導入し、現代まで連綿と瀬戸窯業の歴史をつなぐ努力が続けられました。また、戦時期には、軍需優先により供出させられた金属製品の代わりとなる代用品^{だいようひん}として、生活用品から軍用品、梵鐘^{ぼんしょう}や貨幣まで多種多様なものが生産され、割れにくいやきものの開発や型による成形技術の進歩など、後の瀬戸窯業に欠かせない技術が生み出されました。このように明治中期から昭和前期にかけては、まさに「瀬戸の産業革命」の時代といってもよいでしょう。



古窯(瀬戸染付工芸館)

そして、つくり出されるやきものは、飲食器にとどまらず、便器などの衛生陶器、瓦・タイルなどの建築陶材、碁子などの電磁器、陶磁器製の人形の置物などのノベルティ、新たなやきものであるファインセラミックスなど、瀬戸で作られてないものはないといわれるほど多種多様な製品が生み出され、日本人の生活・文化を支えていきました。日本全国に多くのものが流通し、「やきもの=せともの」を定着させていきました。

関連文化財群を構成する文化遺産

小テーマ	文化遺産名
磁祖民吉が広げた磁器生産	
磁祖 加藤民吉	窯神社、磁祖加藤民吉翁碑、加藤民吉翁碑、加藤民吉翁像、染付山水図花瓶(国指定)、染付山水図水指(国指定)、せともの祭
磁器生産の開始と尾張藩	御蔵会所跡、水野代官所跡、御林方奉行所跡、津金胤臣父子頌徳碑
瀬戸の産業革命	
近代窯業関連	古窯(市指定)、石炭窯(加藤作助工房、加藤唐三郎工房)、重油窯(王子窯)、洞本業窯モロ、一里塚本業窯モロ、王子窯モロ、窯跡の杜
代用品生産	陶製梵鐘(市指定)、防衛食器、湯たんぽ、一銭陶貨、ナイフ、フォーク
生活の中のやきもの	瀬戸の陶磁器の生産用具及び製品(国指定)



染付山水図水指「享和尾製」銘



重油窯(王子窯)



石炭窯(加藤唐三郎工房)



陶製梵鐘



発掘調査された御蔵会所跡



瀬戸村窯之図(文政期)記載の御蔵会所



窯跡の杜(東洞 A 窯付近東屋)

(3) 世界に羽ばたいたせともの ～Made in Seto～

瀬戸では、日本らしさを活かしながら、永い歴史と伝統に裏打ちされた高い技術力により、世界で高い評価を受けたやきものが生み出されました。それらは海外の文化や芸術に影響を与えたり、日本文化を海外に発信するなどの大きな役割を果たしています。

アール・ヌーヴォーに影響を与えたせともの

幕末以降、瀬戸においては輸出陶磁器の開発・生産が積極的に行われていきました。当時欧米を中心に行われていた万国博覧会へ出品された瀬戸の作品は、数多く受賞することとなり、高い評価を受けています。このような海外からの高い評価が、輸出陶磁器生産の進展に大きく寄与することとなりました。

当時の作品の特徴は、^{すいぼくが}水墨画の様に写實的にそして繊細な濃淡で描かれ、「自然描写」を中心とした画が特徴で、それまでの西洋ではなかった独特の世界を醸しだしていたため、西洋諸国で高い評価を得ていきます。イギリスの大英博物館やアメリカのスミソニアン博物館など世界を代表する美術館・博物館に当時の瀬戸の作品が収蔵されていることからその評価の高さがうかがえます。また、これらの作風が後の西洋における新たな潮流となるアール・ヌーヴォーにも影響を与えていったことは特筆すべきことです。

これらの輸出陶磁の好況から、瀬戸の陶磁器産業は活況を呈し、新たな窯屋の創業、人材の確保やインフラの整備などが積極的に行われ「陶都瀬戸」が確立されていきました。



初代川本榊吉
「染付花鳥図獅子鈕蓋付大飾壺」

瀬戸の新たなやきもの～セトノベルティ～

大正期には、釉薬を掛けない締焼しただけの、かわいらしい顔をした幼児の裸形人形である「ビスク人形」がアメリカに輸出され始めました。これが戦後の瀬戸を牽引した「セトノベルティ」(陶磁器製の人形の置物など)の始まりです。その源流は、鎌倉期の窯跡から出土している狒犬や江戸期に生産された置物などにみることができますが、瀬戸産の良質な粘土により、陶彫の分野が瀬戸ではほかの産地より早く確立し、造形的な表現がなされていました。これらが後のセトノベルティの原型づくりの基礎ともなっており、近代にもたらされた石膏型製法とともにノベルティ生産隆盛の土壌となっていきました。



丸山陶器株式会社
「パーティの前(ペア)」

セトノベルティは多くの分業体制のもとで製作され、その労働力として多くの市民が関わり、集団就職を受け入れるなどして、一大産地を形成しました。高品質のノベルティが大量にアメリカに輸出され、戦後の瀬戸窯業発展の中心的役割を果たしました。ノベルティが華やかになりし頃の瀬戸窯業高等学校の卒業生の憧れの職業はセトノベルティの原型師やデザイナー^{げんけいし}だったといえます。西洋文化であるノベルティを、瀬戸の高い技術を有する職人たちが製作し、新たな文化を構築していったのです。

関連文化財群を構成する文化遺産

小テーマ	文化遺産名
アール・ヌーヴォーに影響を与えたせもの	
近代瀬戸陶磁器の生産用具及び製品	瀬戸の陶磁器の生産用具及び製品(国指定)、染付花鳥図獅子鈕蓋付大飾壺(市指定)、釉下彩花唐草文大燈籠(市指定)
近代瀬戸窯業遺産	古窯(市指定)、旧古陶園工場(現瀬戸染付工芸館)
瀬戸の新たなやきもの～セトノベルティ～	
ノベルティの源流	陶製狛犬(国指定)、陶製狛犬コレクション(県指定)、赤津長根窯跡出土の狛犬、浮き金魚
セトノベルティの製品	ビスク人形、ドレスデン人形、動物置物、鳥置物
セトノベルティ生産の現場	丸山陶器株式会社本社建物、丸山陶器のガス窯、旧大東三進工場(現ノベルティ・こども創造館)



加藤奎左衛門
釉下彩花唐草文大燈籠



大東三進(株)の白頭鷲



旧大東三進(株)工場
(現ノベルティ・こども創造館)



赤津長根窯跡出土狛犬



浮き金魚

(4) やきもののまちから Creative City へ ～伝統と革新～

瀬戸では、千年もの永きにわたり時代の流行を敏感に感じ取りながら、そしてイノベーション(技術革新)を繰り返し、多彩なやきものを生み出してきました。その伝統や技術は今日まで受け継がれ、やきものの奥深い伝統を背景として、陶芸家をはじめとする様々な芸術家をはぐくみ互いに交流し、高めあえるまちとなっています。

陶芸の都・瀬戸

瀬戸は世界の陶都^{とうと}であるとともに陶芸の都です。千年もの永い間、連綿とやきものづくりを行ってきた産地は日本のみならず世界的に見ても瀬戸しかなく、その中で先人たちは、実用性だけでなく、やきもののフォルム(形状)や図案などに創意を加え、いかにその時代が要求するものを表現するかという真摯な作業を行ってきています。特に、江戸期の18世紀以降からは、作者の銘を入れた一品制作的な作品が数多くみられるようになります。作者の個性を活かしたものから、それまでの日常品まで様々なやきものが世に送り出されていきます。

明治・大正期には、やきものの芸術性を高めるという考え方が徐々に現れ、陶芸家と呼ばれる芸術家が登場しました。そして、昭和11年(1936)には、「瀬戸陶芸協会」が創設され、約50名の瀬戸在住の、分野が異なる陶芸家が一致団結して結集したことは画期的なことでした。現在も活発な活動を行っており、このように80年もの歴史を有する陶芸団体は世界的に見てもこの瀬戸陶芸協会だけであり、まさに瀬戸市の誇りといえます。



加藤作助工房

イノベーション(技術革新)そして創造へ

瀬戸では時代ごとにイノベーションが行われ、「せともの」は飲食器からノベルティ、碇子、ファインセラミックスなど新たな産業へ裾野を広げるとともに進化を続けてきました。これは、新たなものを受け入れる力や、柔軟な発想力などにより、絶え間のない創造の努力を行ってきたからです。

その一方で、「瀬戸へ行かんでどこへ行く」という言葉があるように、瀬戸は常に外部の人を受け入れる土壌があったことから、多くの「ツクリテ」(ものづくりに携わる人々など)が瀬戸に集まり活動することで、新しい瀬戸がかたちづくられてきました。

また芸術の世界でも、北川民次や藤井達吉など瀬戸出身ではない芸術家の考えを受け入れ、陶芸以外の分野においても、瀬戸独自の芸術文化が育まれていきました。市内には100ヶ所以上の陶壁のほか、やきもので装飾された橋やパブリックアートが随所に見られ、身近に芸術作品と触れあうことができます。パブリックアートとしての陶壁は全国に広がりを見せており、まさに瀬戸がその発祥の地といえます。

瀬戸はこのように多くの「人、モノ、考え」を受け入れることにより、新たな創造へとつながってきた発展するまちなのです。



北川民次陶壁(図書館)

関連文化財群を構成する文化遺産

小テーマ	文化遺産名
陶芸の都・瀬戸	
瀬戸の現代陶芸作品	瀬戸市特別永年保存作品、瀬戸市永年保存作品、瀬戸市美術館収蔵作品、瀬戸信用金庫収蔵作品
現代陶芸作家の工房	加藤作助工房、加藤唐三郎工房
イノベーションそして創造へ	
イノベーションによる新たな展開	電磁器、衛生陶器、タイル、ノベルティ、ファインセラミックス
やきもののまちの風景	やきものを使用した橋（吉田橋ほか）、陶壁
まちなかのパブリックアート	長江録彌作品、加藤昭男作品
芸術家の足跡	北川民次のアトリエ、無風庵（藤井達吉）
「ツクリテ」支援の機関	新世紀工芸館、瀬戸染付工芸館、愛知県立窯業高等技術専門校、愛知県立瀬戸窯業高等学校専攻科



北川民次のアトリエ



加藤唐三郎陶壁（文化センター）



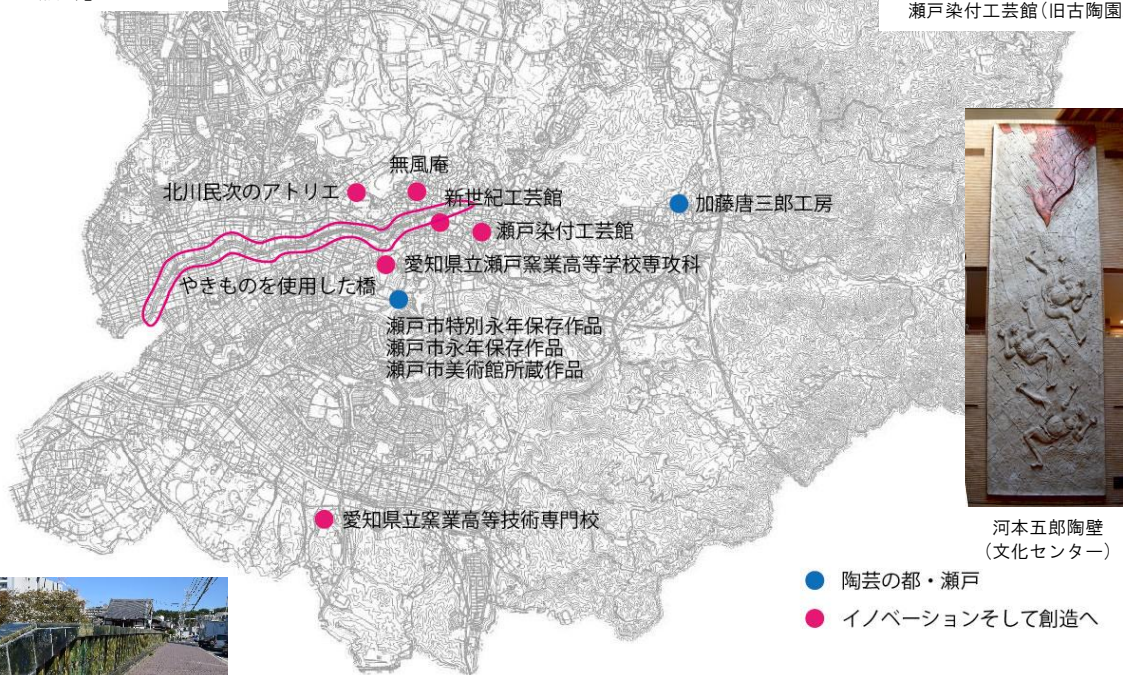
新世紀工芸館（旧瀬戸陶磁器陳列館）



無風庵



瀬戸染付工芸館（旧古陶園工場）



やきものを使用した橋（吉田橋）

(5) まちとなりわい ～職人文化とやきものが息づくまち～

陶磁器生産の隆盛により、瀬戸には多くの人が集まり、食やまちの風景にも独特の職人文化をみることができます。窯道具を積み上げて造られた「窯垣」のほか、旧山繁商店をはじめとした多くのやきもの関係の建築物などによって陶都らしい風景がかたちづくられています。まちの中に職人文化とやきものが息づいているのが瀬戸のまちの特徴といえます。

職人文化のまち

陶磁器生産は、鉦業者、ロクロ師、絵付師、焼き手、窯築き、荷造り、原型師等の専門化された各種の職人の共同作業によって成り立ち、個々人の技量に応じた仕事がそれぞれに存在し、職人としての自負を持っていました。瀬戸は職人氣質からくる金離れの良さ、気前の良さから「尾張の小江戸」とも呼ばれ、窯元たちと消費地問屋の商談や接待などが行われる料亭や旅館などが軒を連ねる豪華なまちであるとともに、瀬戸に行けば何かしらの働き口があるという職人のまちとしても知られていました。

シコと呼ばれた宴会や慰安旅行であるヤマイキには、定番の五目飯(ゴモ・アジメシ)が振る舞われ、スタミナ食の鰻や焼肉の店、深川神社門前からはじまった「瀬戸焼そば」など、職人たちをはじめとした庶民の今日の独特の食文化につながっています。



旧山繁商店

やきもののまちの風景

瀬戸川の南北兩岸の斜面地を中心として、窯道具を積み上げて作った塀や擁壁が、江戸期末から一般的な造成法としてみられ、瀬戸では「窯垣」と呼ばれています。時代の変遷とともに石垣やコンクリート擁壁に変えられているものも多い中、瀬戸ならではの特徴的な景観を形づくっています。何度も使用されてきた窯道具を緻密に積み上げた窯垣は、特有の風合いを有しており陶工の血と汗がこもった瀬戸市の顔ともいえるものです。廃材を再利用することで自然に生み出されたその風景は、“美しさ”にこだわり、追求してきたやきものづくりにも通じるものがあります。今日のまちづくりにおいてもその精神が受け継がれており、やきものを使用した橋や陶壁がまちに彩りを添えています。



窯垣(仲洞町)

明治期から昭和初期に町場が拡大する中、窯元たちの大きな資本の下で鉄道などの都市インフラもほかに先駆けて整備され、皇族も逗留された旧山繁商店の離れのような贅を尽くした施設も窯元たちによって作られました。瀬戸では西洋のトラス構造を取り入れた木造の洋風建築や、西洋の意匠を伝統的な日本の意匠に取り入れた神社建築もみられ、新たな時代の技術やデザインを取り入れる気風をうかがうことができます。昭和初期の鉄筋コンクリート建物についても、テラコッタタイルを随所に配した重厚なビルや、和風の意匠を意識した切妻屋根の交番建物などの陶都瀬戸ならではの多様な建造物が特徴的です。

関連文化財群を構成する文化遺産

小テーマ	文化遺産名
職人文化のまち	
歴史的建造物群(陶磁器商店・盛り場)	大廻戸・旧桜町建造物群、宮前地下街
歴史的建造物群(陶磁器窯屋・問屋)	洞建造物群、洞本業窯、北新谷建造物群、旧山繁商店(国登録)、久米邸、丸一国府商店、西本町・東本町建造物群
歴史的建造物群(陶磁器問屋・倉庫)	陶本町通り建造物群
職人たちのなりわい	瀬戸の陶磁器生産用具及び製品(国指定)
シコやヤマイキでのふるまい	五目飯(ゴモ・アジメシ)
やきもののまちの風景	
窯垣の小径	窯垣、窯垣の小径資料館、窯垣の小径ギャラリー
西洋の構造・意匠を取り入れた木造建造物	瀬戸永泉教会礼拝堂(国登録)、旧陶磁器陳列館、陶彦社本殿
都市としてのインフラ整備	瀬戸公園(現陶祖公園)、馬ヶ城浄水場
近代の鉄筋コンクリート建造物	瀬戸陶磁器会館



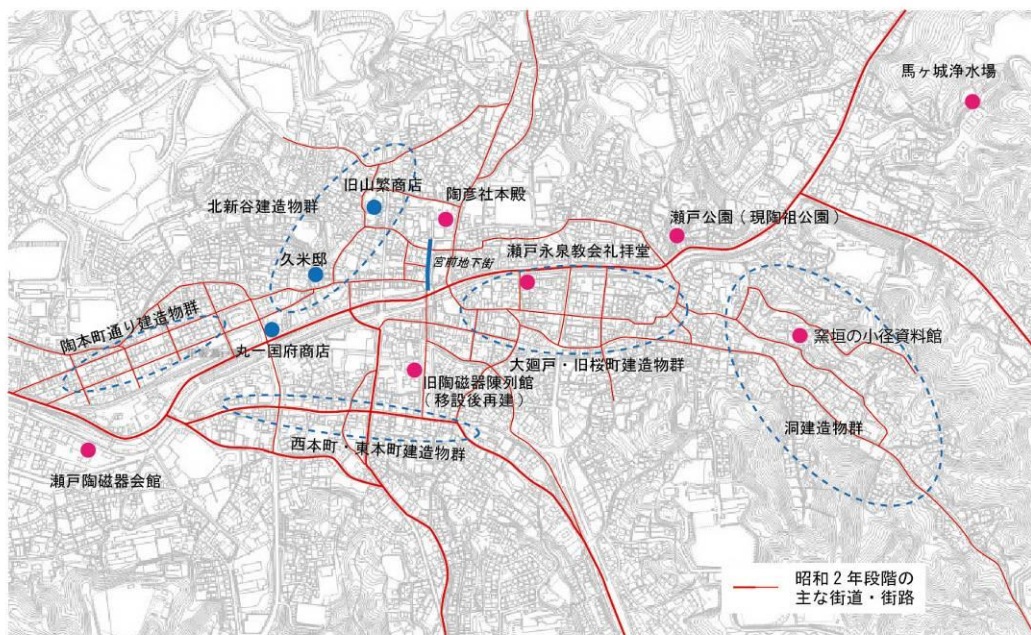
旧桜町の街路



窯垣の小径資料館



瀬戸永泉教会礼拝堂



西本町の街路



五目飯

瀬戸の陶磁器生産用具及び製品
(7ツと呼ばれる厚手の半纏)

(6) 街道と交流 ～尾張・三河・美濃の三国の境～

旧尾張国の北東端に位置し、三河・美濃の国境に接する瀬戸では、古くから様々な人・モノの交流が生まれました。戦国期に頻繁に争いが繰り返されたのは、それだけ瀬戸の地が重要であったことを示しています。

尾張と美濃・三河の争いの舞台となった城

瀬戸には伝承地も含めて 24 ヶ所の中世の城館跡があり、中でも名古屋から東濃を抜けて信州飯田まで通じる信州飯田街道の要所にあたる品野地区にあった品野城・桑下城は、戦国期に織田氏と松平氏・今川氏が攻防を繰り返した地として伝わっています。文明 14 年(1482)の大槇山から安戸坂にかけての合戦では、瀬戸の品野地区から東濃にかけての勢力を背景とした永井(長江)民部が、今村・瀬戸・赤津・幡山地区の勢力を背景とした松原広長を破っています。その後、永井(長江)民部らは今川義元支配下であった三河の松平家の臣として品野の城を守り、織田氏の勢力と永禄 3 年(1560)桶狭間の合戦頃まで攻防戦を繰り返しました。



桑下城跡(発掘調査)と品野城跡
(愛知県埋蔵文化財センター提供)

また、幡山地区には東から武田信玄勢が進出したものと伝えられる城館跡も残されています。瀬戸は三国境をめぐる著名な戦国武将の勢力地争奪戦が繰り返される舞台ともなったのです。

街道の往来による交流

古くは、古墳時代の遺跡から広域の交流の後を偲ばせるものがみつっていますが、三国を結ぶ街道の整備により、近世の名古屋と周囲との人・物の往来は、年を追うごとに頻繁となりました。

街道の中でも特別の街道としてあげられるのが、名古屋城と尾張初代藩主徳川義直公の廟所が築かれた定光寺を結ぶ「殿様街道」です。定光寺は名古屋城からみて鬼門の北東にあたることや軍事的な面でも重視されており、歴代の藩主やその名代が折にふれ墓参に訪れました。そのため藩主往来時には街道が整備されるという歴史を重ねてきました。また、この地の水野氏は代々尾張東部域の林野を管理する御林方奉行を任され、行政・司法を司る代官所が水野に設置された当初は、その奉行職も兼任していました。このため、江戸期を通じて知多半島の一部も含めた尾張東部の行政の中心地は水野地区にあり、名古屋城下と直接人物や物資が往来する要地でありました。



源敬公(徳川義直)廟

また、「信州飯田街道」は中山道や下街道に次いで利用された名古屋と信濃を往来する脇街道で、近在の農民等が中馬と呼ばれる陸送稼ぎを行ったことから「中馬街道」とも呼ばれました。大きな中継地点であった旧下品野村には町場が形成され、やきものをはじめとする東西の文物が行き交い、町場の賑わいを背景に独特の祭礼も生まれました。

関連文化財群を構成する文化遺産

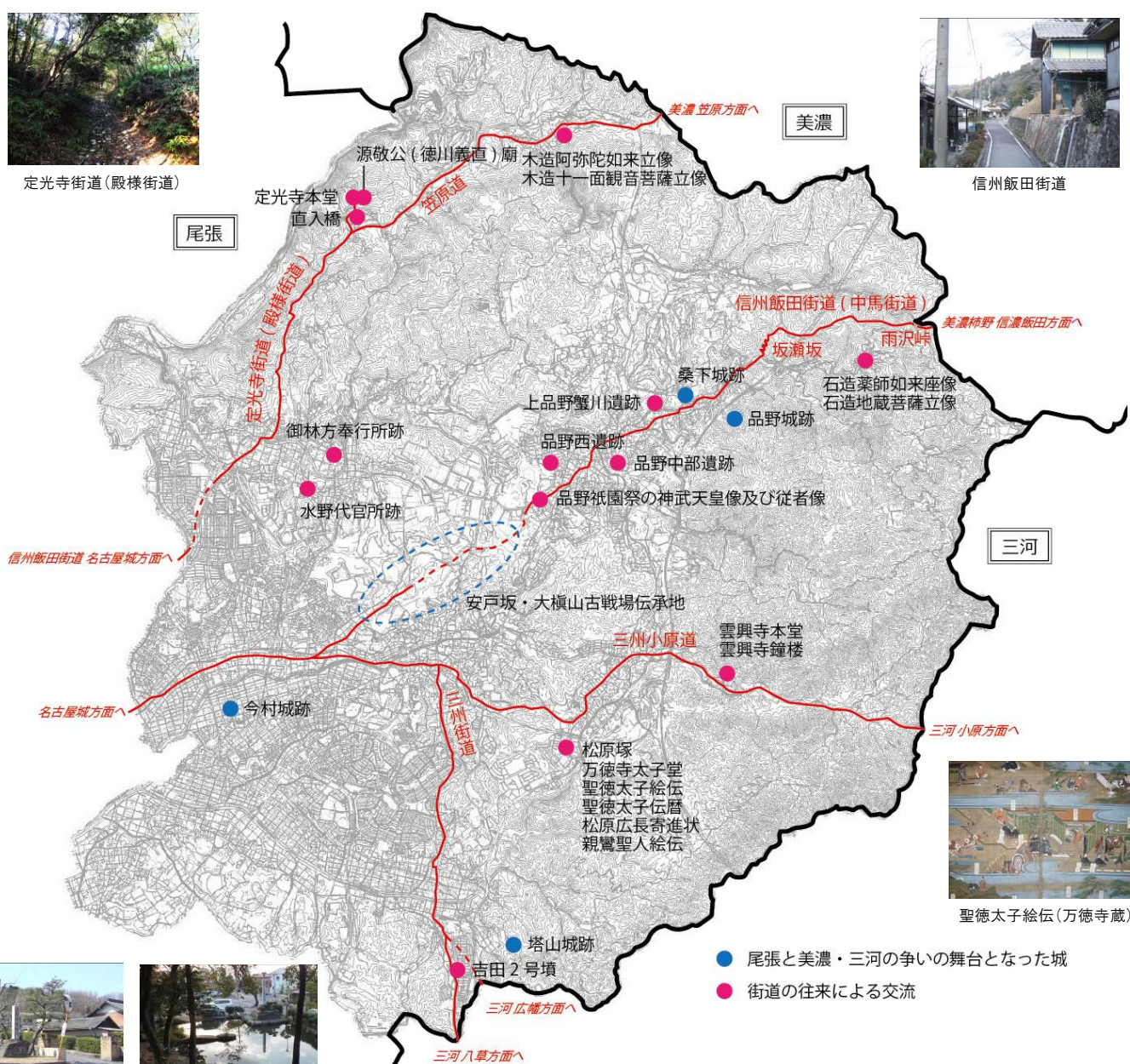
小テーマ	文化遺産名
尾張と美濃・三河の争いの舞台となった城 信州飯田街道沿いの武士勢力の覇権争い (戦国 長江氏・松原氏) 尾張国北東端の要衝をめぐる攻防戦 (戦国 織田氏・松平氏) 三河国山間部から尾張国へ進出する前線拠点 (戦国 武田氏)	安戸坂・大槇山古戦場伝承地、今村城跡、松原塚
	品野城跡、桑下城跡
	塔山城跡
街道の往来による交流 西三河系横穴式石室 古代寺院等遺跡 平安期木造仏 尾張北東丘陵の山間地での中世禅宗寺院の成立 三河の真宗寺院・武士勢力の進出 名古屋城の北東を守護する要地である定光寺への初代尾張藩主廟の建設と墓参道の整備(近世) 尾張藩東部域の行政拠点(近世) 近世以降の信州飯田街道等の人馬往来と、中継地の町場成長	吉田2号墳
	品野西遺跡、品野中部遺跡、上品野蟹川遺跡
	木造阿弥陀如来立像・木造十一面観音菩薩立像(県指定)
	定光寺本堂(国指定)、雲興寺本堂、雲興寺鐘楼(国登録)
	万徳寺太子堂、聖徳太子絵伝(市指定)、聖徳太子伝暦・松原広長寄進状(市指定)、親鸞聖人絵伝
	定光寺街道(殿様街道)、源敬公(徳川義直)廟(国指定)、直入橋(市指定)
	御林方奉行所跡、水野代官所跡
	信州飯田街道(坂瀬坂～雨沢峠)、石造薬師如来座像・石造地藏菩薩立像(市指定)、品野祇園祭の神武天皇像及び従者像(市指定)



定光寺街道(殿様街道)



信州飯田街道



水野代官所跡



今村城跡



聖徳太子絵伝(万徳寺蔵)

- 尾張と美濃・三河の争いの舞台となった城
- 街道の往来による交流

(7) 自然との共生 ～豊かな自然とその再生～

自然との共生の中でやきものが誕生し、『尾張名所図会』において自然の造形である珍しい風景が紹介されている瀬戸。現在も国の天然記念物オオサンショウウオが生息する豊かな自然がみられますが、江戸後期から明治にかけては^{はげやま}禿山が広がり、土砂流出も頻発するなど自然と対立する時代もありました。

オオサンショウウオが生息する豊かな自然

里山の風景が美しいのは、人々の暮らしとともにあるためです。下半田川町の蛇ヶ洞川^{じゃがほらがわ}では、国の特別天然記念物であるオオサンショウウオの生息を里山が守ってきました。そこには水田と丘陵、川によって形づくられた集落景観が残っています。また、片草地区や白岩地区では中馬街道沿いの山村風景が残っています。

また、明治期、瀬戸は陶磁器産地として広く知られ、多くの観光客が訪れていました。『尾張名所図会』には、窯場や六角陶碑、寺社とともに、自然の造形である珍しい風景―奇観―としての名所が紹介されています。中生層や花崗岩層を流れる溪谷には巨岩や滝がみられ、目鼻石^{めばなし}や石樋^{いしどい}といった特徴ある景観が紹介されています。また市域西端の東谷山^{とうごくさん}では秋の紅葉、東端の三国峠では春のツツジと三国を見渡す景観を称賛しています。

こうした丘陵地は人々により利用され、里山として変化しながら、自然と人の織りなす風景を今日まで伝えるとともに、特異な景観は人々を瀬戸へといざなってきました。



オオサンショウウオ

禿山からの再生

やきものづくりには大量の木材が必要です。江戸後期から明治期にかけて窯業燃料として、窯場周辺の丘陵地の木が伐採されたことによって禿山が広がり、禿山からの土砂流出も頻発していました。

それを防ぐために実施されたのが砂防のための植林です。すでに江戸期から行われており、明治期以降は、オランダの治山工法を導入し、デレーケによる調査や東京帝国大学雇教師ホフマンの設計による砂防工事が進められ、今日の森林地が形成されました。当時の工法はホフマン砂防遺構群^{はぎごてん}や萩御殿周辺でみることができ、東大演習林水文学研究所では現在も観察が続けられています。



ホフマン砂防遺構群

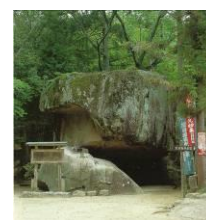
馬ヶ城では、回復した林地が水源涵養林となりシデコブシの群落を形成するなど、瀬戸市の水源を守っています。

関連文化財群を構成する文化遺産

小テーマ	文化遺産名
オオサンショウウオが生息する豊かな自然	
下半田川とオオサンショウウオ	下半田川集落(景観)、オオサンショウウオ(国指定)、掛川小学校シデコブシ群落・笠原村両半田川村国境争論絵図
水野川の風景	水野川(景観)、イチヨウ(名木)、ムクノキ(名木)、マルバタラヨウ(市指定)、マメナシ(市指定)、ヒトツバタゴ(名木)、三社大明神社(社叢)、上水野八幡神社(社叢)、下水野八幡神社(社叢)
山村の風景	白岩集落(景観)、白岩八王子神社(社叢)、片草集落(景観)、片草八幡神社(社叢)
溪谷の奇観	目鼻石(市指定)、石樋(市指定)
山の風景	東谷山、尾張戸神社、三国山
岩屋堂	岩屋堂、岩屋堂公園、浄源寺、イロハモミジ、イタヤカエデ、オオモミジ
定光寺	弁天堂、定光寺公園、定光寺
雲興寺	性空石、葛籠岩、東海自然歩道
禿山からの再生	
砂防の森	御林方奉行所跡、ホフマン砂防遺構群、東京大学附属演習林生態水文学研究所、萩御殿の森
水源の森	馬ヶ城浄水場、馬ヶ城シデコブシ群落
海上の森	海上集落(景観)、篠田池(湿地)、海上砂防池(景観)、あいち海上の森センター



目鼻石



岩屋堂



石樋



海上砂防池



マメナシ



(8) 地域と祭り ～伝統の継承と人々の交流～

瀬戸市は、江戸期の18の村々が合併してできたまちで、それぞれの地域ごとに多様な特色のある祭りが受け継がれています。祭りに向かって地域ごとに準備を進める中で、地域の人々が交流し、祭りのしきたりを伝承しています。祭り当日の熱狂は地域の一体感を高め、地域への誇りや愛着が生まれます。

多様な地域の祭り

江戸期の猿投神社信仰として神社へ飾り馬(オマント)を奉納する行事として始まった警固^{けいこ}祭りは、三河西部から尾張東部で行われ、瀬戸市内では山口、菱野、本地、今村など市域南部で行われています。オマントの標具は村ごとに異なり、標具にまつわる言い伝えがそれぞれに残っています。それは武田信玄や小牧長久手合戦など、地域内に残る城跡や伝承史跡にまつわるもので、地域内で伝承された歴史を物語っています。



菱野のおでく警固祭り

品野祇園祭^{ぎおん}は、尾張地方でみられる津島社の天王祭に山車を出した祭りを原型とし、神武天皇像等三体の人形がのる山車をやぐらに見立てた盆踊りへと、独特の変化をしてきました。旧中馬街道^{ちゅうま}の道路沿いには各種露店が立ち並び、一年を通じてこの地区最大の賑わいとなります。祭りに合わせての里帰りや、祭りの準備や踊りの練習が地区を挙げて行われます。賑わいの中に地域の人とのつながりが広がっています。

そのほか、商売繁盛の神様として信仰を集める菩提寺や尾張ゑびす社で開催される五日えびす、曾野稻荷の初午、盗難除けとして広く人々の信仰を集めている雲興寺^{うんこうじ}の性空祭^{しょうくうさい}、祭りの賑わいや各種露店を楽しみとして人々が集う万徳寺^{まんとくじ}の太子祭^{たいし}や宝生寺^{ほうしょうじ}の地藏祭り、飴屋の屋台が建ち並ぶことで有名な宝泉寺^{ほうせんじ}のお薬師さん^{やくし}(別名「アメンボ祭り」)など、特色のある社寺の祭りがそれぞれの地域で行われています。

やきものの祭り

陶祖^{とうそ}に関わる祭礼のせと陶祖まつり、磁祖^{じそ}に関わる祭礼のせともの祭は、地域イベントとしての祭りでは最大のもので、祭礼とともに産業祭として陶磁器販売市が並びます。特に昭和7年に始まったせともの祭は、全国的にも有名で、年間で最も多くの人々が瀬戸を訪れるイベントとなっています。



せともの祭

これらの祭りは、旧瀬戸村の信仰と「せともの」の全国的な知名度が複合して生まれたものです。また、陶磁器販売市は売り手と買い手が直接つながる機会を創り、祭りに新たな価値を生み出しています。

地域の祭りが瀬戸市のアイデンティティでもあるやきものを全面に打ち出すことにより、広域から集客するイベントへと成長し、市民のまちに対する愛着や誇りを醸成しています。

関連文化財群を構成する文化遺産

小テーマ	文化遺産名
多様な地域の祭り	
警固祭り	菱野のおでく(市指定)、菱野のおでく警固祭り(市指定)、山口の警固祭り(市指定)、本地の警固祭り、今村の飾り馬、菱野郷倉文書(市指定)、本地郷倉文書
品野祇園祭	品野祇園祭の神武天皇像および従者像(市指定)、全宝寺
寺社の祭り	菩提寺(五日えびす)、本地尾張ゑびす社(五日えびす)、曾野稲荷社(初午)、雲興寺(性空祭)、深川神社本殿(市指定)、宝生寺(地藏祭り)、万徳寺(太子祭り)、宝泉寺(お薬師さん)
やきものの祭り	
せと陶祖まつり	陶彦社
せともの祭	窯神社



宝泉寺(お薬師さん)



菩提寺(五日えびす)



- 多様な地域の祭り
- やきものの祭り



品野祇園祭



万徳寺(太子祭り)



雲興寺(性空祭)

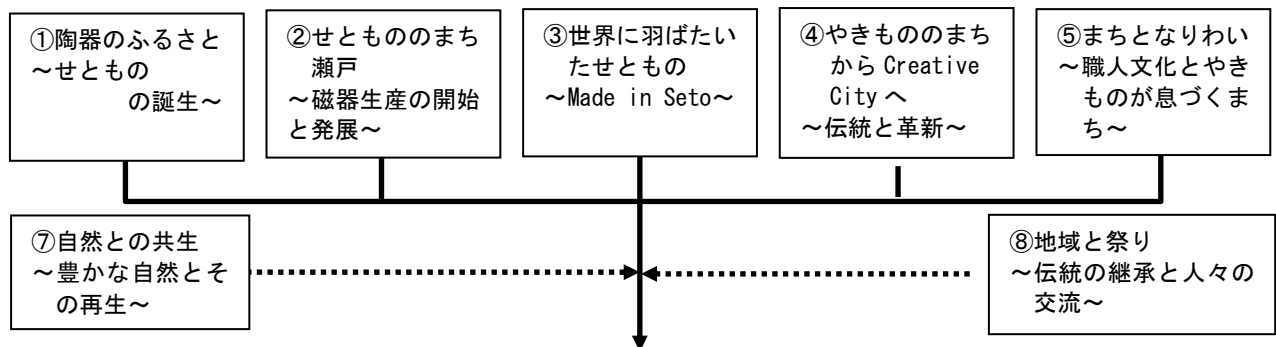
(9) 関連文化財群のまとめ

8つのテーマによる関連文化群の設定により、瀬戸市の文化財・文化遺産をわかりやすく整理することができましたが、一方で、全国ブランドである「せともの」の魅力が分割され、全体としてのインパクトに欠けるという側面もあります。

瀬戸市の歴史文化に関するアンケートでは、わかりやすく、ドラマ性を感じ、インパクトのあるストーリーを求める声が多く出されています（82 ページを参照）。それぞれのテーマにおける強みを総合化して、インパクトのあるストーリーを設定するなどの工夫が求められます。

また、想定するターゲットによって、ストーリーの打ち出し方を変えるなどの工夫も求められます。

■総合化したストーリー(案)



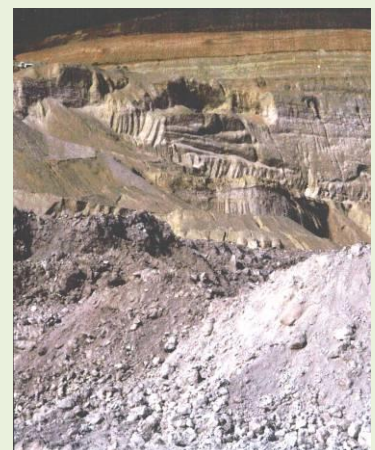
千年もの歴史が現在につながる ～やきものの代名詞「せともの」～

千年以上も連綿とやきものをつくり続けているまち「瀬戸」。このような産地は世界的にみても瀬戸だけです。日本らしさを活かしながら、高い技術力により、世界でも高い評価を受け、日本文化を海外に発信するなどの大きな役割を果たしました。常にイノベーション(技術革新)をくり返し、セトノベルティをはじめ多彩なやきものを生みだし、その気風は陶芸家をはじめとする様々な芸術家を生みだしてきました。現在でも、陶都瀬戸としての発展を感じさせる建物や窯垣の小径、せともの祭の賑わいなど、やきものの代名詞として瀬戸の地名が使われるにふさわしい風景をまちの随所にみることができます。

自然との共生の中で誕生したやきもの

良質な粘土に恵まれ、森の木や水なども利用し、自然との共生の中でやきものが誕生しました。やきものの原料となる陶土・珪砂の採掘場は瀬戸キャニオンとも呼ばれ、鉱物がとけだした水の鮮やかな色は歴史の重みと自然との共生を感じさせ、見る人を魅了する圧巻の風景です。

最も古い窯跡を10世紀中ごろの広久手第30号窯にみることができるほか、平安期の窖(穴)窯から現代のガス窯まであらゆる時代の窯が存在し、各時代のすべての移り変わりを見ることができます。各時代をリードしたものづくりの現場(工房など)があることも瀬戸市の大きな特徴です。



陶土採掘場

とうそ じそ 陶祖、磁祖、織田信長、尾張徳川家らによって築かれた礎

瀬戸のやきものは陶器と磁器という2種類のやきものの歴史があることも特徴であり、陶祖藤四郎、磁祖民吉とよばれる2人の先人がその道を切り開きました。また、陶器は織田信長によってその価値が認められ、戦国武将に愛されました。徳川家康の意向を受けた尾張徳川家は美濃に移った陶工を瀬戸に呼び戻し、尾張藩の保護のもとにやきもののブランド「瀬戸」が成長しました。初代藩主の義直はこの地を愛し、その廟所が定光寺につくられましたが、その源敬公廟げんけいこうびょうの焼香殿しょうこうでんには穴田窯跡などで作られた敷瓦が用いられるなど、尾張藩と瀬戸のやきものの強い結びつきを感じることができます。



源敬公(徳川義直)廟

世界にはばたくやきものの高い技術力

幕末以降、瀬戸においては輸出陶磁器の開発・生産が積極的に行われてきました。この進展に大きく寄与したのが、万国博覧会への出品でした。せとものに施される絵付は、それまでの西洋にはなかった独特の世界を醸しだしていたため、後の西洋における新たな潮流となるアール・ヌーヴォーにも影響を与えていきました。



セトノベルティ

大正期には、陶磁器製の置物＝セトノベルティが輸出されはじめ、戦時中は一時途絶えますが、戦後復興の中、輸出が本格的に再開されると、技術は飛躍的に向上し、高品質のノベルティが大量に輸出され、戦後の瀬戸窯業発展の中心的役割を果たしました。

瀬戸では時代ごとにイノベーションをくり返し、「せともの」は飲食器からノベルティ、碁子、ファインセラミックスなど新たな産業へ進化し続けてきました。新たなものを受け入れるという土壌は、様々な人を受け入れ、多くの「ツクリテ」が瀬戸に集まり、新たな瀬戸市を創造してきました。芸術の分野でも陶芸だけでなく、瀬戸独自の芸術文化がはぐくまれました。

やきもののまちの風景

近代のやきもの技術の発展、大量生産、流通の拡大などによって、現在の瀬戸市の中心部である旧瀬戸村・瀬戸町域では都市化がすすみ、「陶都瀬戸」が形づくられました。やきものに関係するロクロ師や絵付師、焼き手など多くの職人が働き、瀬戸ならではの職人文化や五目飯(ゴモ)などの特色ある食文化がはぐくまれました。

今でも、西洋の構造・意匠を取り入れた木造の洋風建築である瀬戸永泉教会や近代の鉄筋コンクリート建造物である瀬戸陶磁器会館、窯屋や旧山繁商店をはじめとした卸問屋、窯道具を利用した「窯垣」かまがきなど陶都らしい景観が随所にみられます。特に窯垣が多くみられる洞地区・北新谷地区では、陶磁器生産に直接関連するものが多くあり、これらを活用した資料館やギャラリーもあり、窯垣のこみち小径として

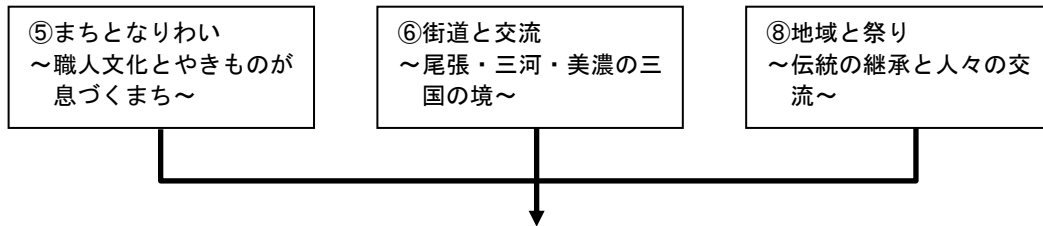


窯垣(窯神町)

親しまれています。また、陶祖や磁祖に関わる祭礼として始まり、陶磁器販売市として成長した「せともの祭」「せと陶祖まつり」は大きな集客をよび賑わいをみせています。

生活の中にやきものが息づいているのが、瀬戸市の大きな特徴です。

■市民に最も関心の高い「歴史的な町並み・街道」に注目したストーリー(案)



三国を結ぶ街道と「陶都瀬戸」の風景

旧尾張・三河・美濃の三国の境に位置する瀬戸は、これらの国を結ぶ街道が古くから整備され、街道の往来を通じて、様々な人やモノの交流が生まれました。明治・大正期には陶磁器生産の発展とともに都市化が進み、陶都の賑わいと文化が形成されました。今でも、陶都瀬戸としての発展を感じさせる風景をまちの随所にみることができます。

三国を結ぶ街道の往来

尾張と美濃笠原方面を結ぶ「笠原道」、尾張と美濃柿野・信州飯田方面を結ぶ「信州飯田街道」、尾張と三河小原方面を結ぶ「三州小原道」、尾張と三河八草方面を結ぶ「三州街道」があり、近世の名古屋と周囲との人・物の往来は、年を追うごとに頻繁となりました。

「信州飯田街道」は中山道や下街道に次いで利用された名古屋と信濃を往来する脇街道で、近在の農民等が中馬ちゅうまと呼ばれる陸送稼ぎを行ったことから「中馬街道」とも呼ばれました。大きな中継地点であった下品野では

町場が形成され、大いに繁栄しました。江戸期末から始まった品野ぎおん祇園祭は津島社の天王祭に山車を出した祭りが原型となっており、7月の第3土曜日に行われ、新暦盆に近いことから、神武天皇像等三体の人形がのる山車をやぐらに見立てた盆踊りへと、独特の変化をしてきました。旧中馬街道の道路沿いには各種露店が立ち並び、一年を通じて最大の賑わいとなります。

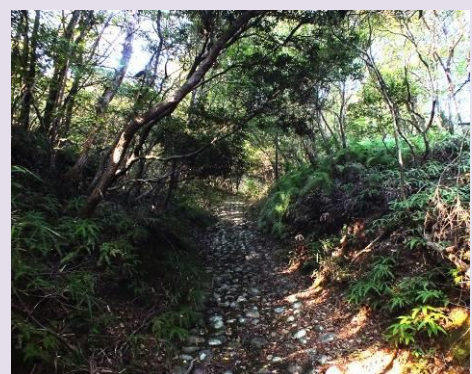


品野祇園祭

初代尾張藩主徳川義直よしなお びょうしよの廟所じょうこうじと名古屋城下を結ぶ「殿様街道」

この地を好んだ初代尾張藩主徳川義直の廟所が築かれた定光寺じょうこうじには、歴代藩主や名代が墓参し、その際に利用した定光寺街道は「殿様街道」とも呼ばれました。定光寺は、名古屋城からみて鬼門の北東にあたり、軍事的にも重視された地でした。

この地の水野氏は代々尾張東部域の林野を管理する御林方奉行おはやしかたぶぎょうを任され、行政・司法を司る代官所が水野に設置された当初は、その奉行職も兼任していました。このため、江戸期を通じて知多半島の一部も含めた尾張東部の行政の中心地は水野地区にあり、名古屋城下と直接人物や物資が往来する要地でした。



殿様街道

陶都の町並み

明治・大正期には、人口増加を背景として、町場が拡大し、瀬戸川沿いに官庁街の形成がなされる中、新たな建造物が次々に築かれ、「陶都瀬戸」が形づくられました。

瀬戸市の建造物としては、窯道具を利用した「窯垣」が近世末期から瀬戸川の南北両岸の斜面地を中心に広く特徴的にみられます。何度も使用されてきた窯道具を緻密に積み上げた「窯垣」は、特有の風合いを有しており陶工の血と汗がこもった瀬戸市の顔ともいえるものです。

このような窯垣が特に多くみられるのは^{ほら}洞地区や北新谷地区(中央部)で、ほかに大廻戸・旧桜町地区、^{おおまると}陶本町地区も加えたエリアに、それぞれ明治期以降の歴史的町並み景観が残っており、成長する陶都の面影を今日に伝えており、今日の銀座通り・せと末広町商店街等のアーケード街や宮前商店街とともに瀬戸中心部の町並みを形成しています。



窯垣のみられる街角(仲洞町)

第4章 瀬戸市の文化財の保存活用

1 文化財の保存活用の現状と課題

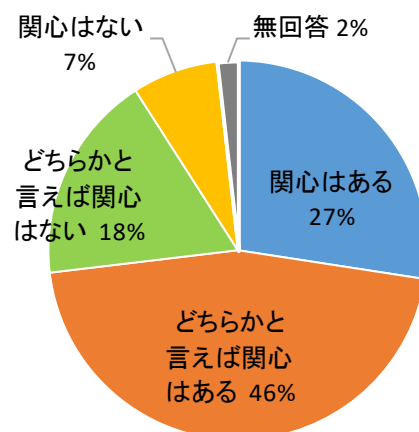
(1) 文化財に対する市民の捉え方

ここでは、瀬戸市の歴史文化に関するアンケート(平成28年7月実施、参考資料を参照)から、文化財に対する市民の捉え方を整理します。

ア 歴史文化への関心

「文化財・文化遺産に関心はありますか」という設問に対し、「どちらかと言えば関心はある」が46%と最も多く、「関心はある」を含めると73%が関心を持っています。「どちらかと言えば関心はない」と「関心はない」の合計25%を48ポイント上回っており、市民の歴史文化に対する関心は高いといえます。

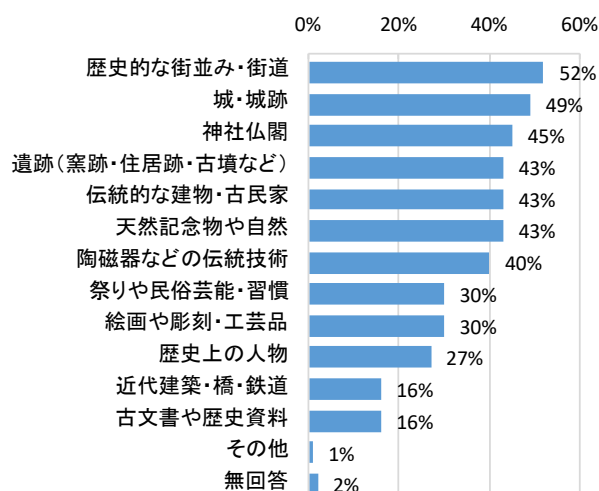
年代別では70歳以上が最も関心があるものの割合が高く、40歳代が最も低い状況です。また、女性よりも男性の方が関心は高くなっています。



イ 関心のある文化財・文化遺産

関心のある文化財・文化遺産としては、「歴史的な町並み・街道」が52%と最も多く、次いで、「城・城跡」49%、「神社仏閣」45%、「遺跡(窯跡・住居跡・古墳など)」43%、「伝統的な建物・古民家」43%、「天然記念物や自然」43%となっています。一方、「近代建築・橋・鉄道」、「古文書や歴史資料」はそれぞれ16%と関心は低くなっています。

性別・年齢別で違いがでています。特に70歳以上で「陶磁器などの伝統技術」に対する関心の高い点が特徴的です。

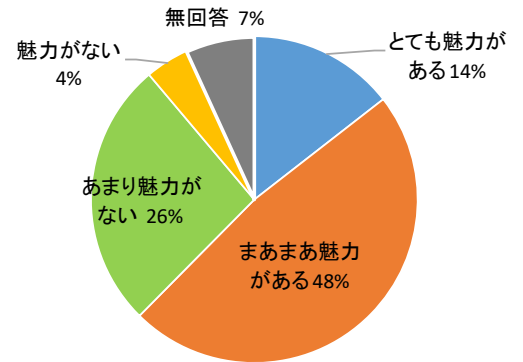


■性別・年代別の関心の高いもの(上位5位)

	1位	2位	3位	4位	5位
全体	歴史的な町並み・街道 52%	城・城跡 49%	神社仏閣 45%	遺跡 43%	伝統的な建物・古民家 43%
男性	城・城跡 54%	遺跡 50%	歴史的な町並み・街道 49%	神社仏閣 48%	天然記念物や自然 43%
女性	歴史的な町並み・街道 55%	伝統的な建物・古民家 46%	城・城跡 45%	神社仏閣 44%	天然記念物や自然 43%
30歳未満	歴史的な町並み・街道 52%	城・城跡 50%	天然記念物や自然 47%	神社仏閣 39%	伝統的な建物・古民家 36%
30歳代	歴史的な町並み・街道 59%	城・城跡 54%	神社仏閣 42%	遺跡 39%	天然記念物や自然 38%
40歳代	城・城跡 55%	歴史的な町並み・街道 52%	神社仏閣 44%	伝統的な建物・古民家 42%	天然記念物や自然 41%
50歳代	歴史的な町並み・街道 52%	城・城跡 50%	神社仏閣 47%	伝統的な建物・古民家 42%	天然記念物や自然 39%
60歳代	歴史的な町並み・街道 56%	城・城跡 50%	伝統的な建物・古民家 50%	天然記念物や自然 48%	遺跡 47%
70歳以上	陶磁器などの伝統技術 54%	遺跡 52%	神社仏閣 48%	歴史的な町並み・街道 47%	城・城跡 43%

ウ 瀬戸市の歴史文化の魅力

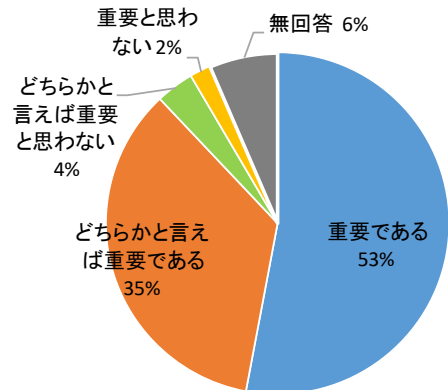
瀬戸市の自然を含めた歴史文化については、「まあまあ魅力がある」が48%と最も多く、「とても魅力がある」を加えると62%が魅力があるとしています。「あまり魅力がない」と「魅力がない」の合計30%を32ポイント上回っており、魅力を感じている市民が多いといえます。



エ 文化財・文化遺産の保存・活用の重要性

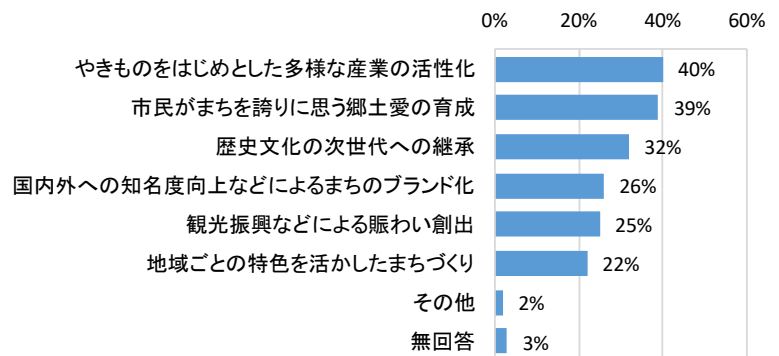
文化財・文化遺産の保存・活用の重要性に関しては、「重要である」が53%と最も多く、「どちらかといえば重要である」を含め、88%が重要だとしています。

「重要と思わない」という回答は2%しかなく、「文化財・文化遺産に関心はない」と回答した人でも72%が重要だとしており、多くの市民が文化財・文化遺産の保存・活用の重要性を認識しています。



オ 文化財・文化遺産の保存・活用の方向性

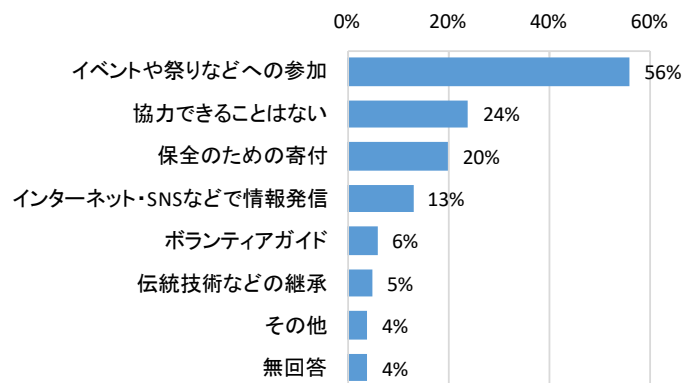
瀬戸市の文化財・文化遺産の保存・活用の方向性について、重要だと思うものについては、「やきものをはじめとした多様な産業の活性化」をあげた人が40%、「市民がまちを誇りに思う郷土愛の育成」をあげた人が39%あります。



カ 文化財・文化遺産の保存・活用のために協力できること

文化財・文化遺産の保存・活用のために協力できることについては、「イベントや祭りなどへの参加」が56%を占めており、気軽に楽しく参加できるものについては多くの市民の協力が得られる可能性があります。

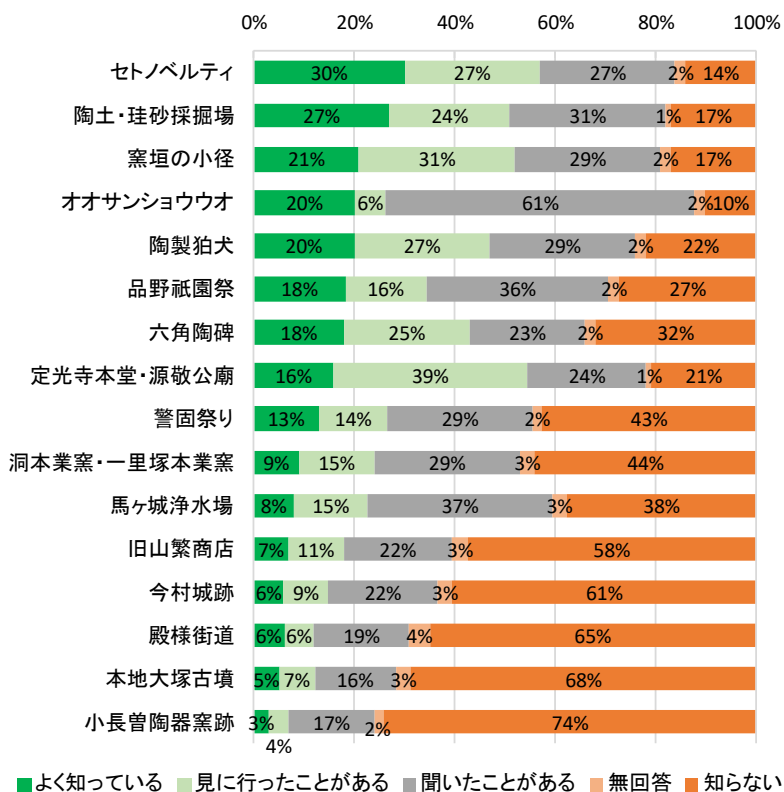
「協力できることはない」という回答が24%を占めていますが、「保全のための寄付」が20%あることは、市民共有の財産として守っていこうという関心の高まりが背景にあるものとして考えられます。



キ 文化財・文化遺産の認知度

市民の文化財・文化遺産に対する認知度を「よく知っている」の割合の高い順番から示したものが右図です。「セトノベルティ」は30%の人がよく知っていると回答しており、次いで「陶土・珪砂採掘場」の27%です。

一方、最も認知度の低かったのは「小長曾陶器窯跡」で74%が知らない^{こながそ}と回答しています。そのほか、市民の半数以上が知らないものとして「本地大塚古墳」^{ほんちおおつか}「殿様街道」^{やましげ}「今村城跡」があげられます。

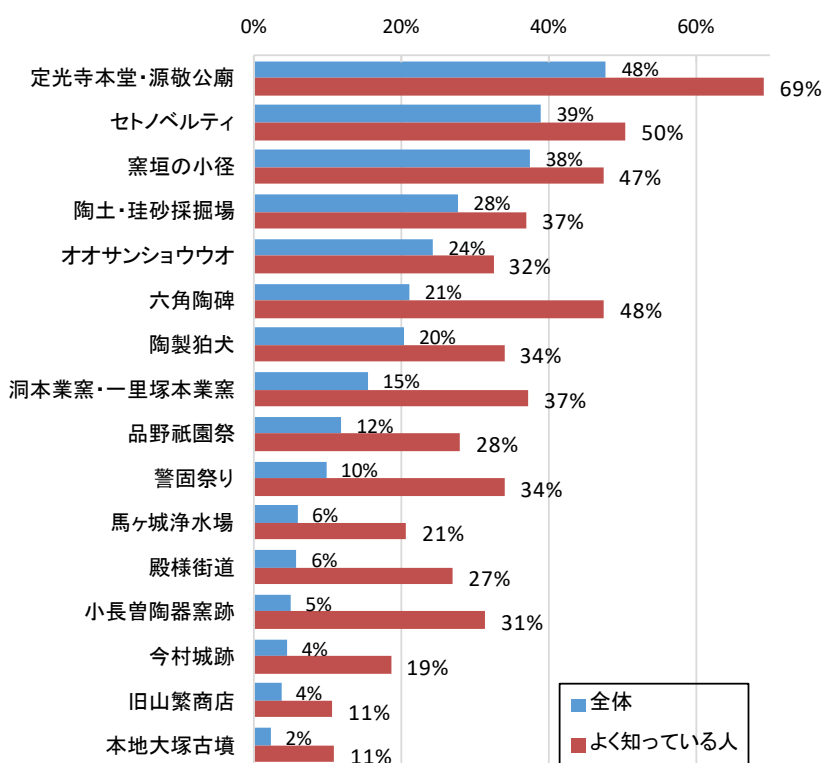


ク 瀬戸らしい文化財・文化遺産として人にPRしたいもの

瀬戸らしい文化財・文化遺産として人にPRしたいものとしては、「定光寺本堂・源敬公廟」^{げんけいこうびょう}が48%と最も高く、次いで「セトノベルティ」39%、「窯垣の小径」^{かまがき こみち}38%となっています。

「よく知っている」と回答した人だけに着目し、人にPRしたいものとしてあげた人の割合をみると、「定光寺本堂・源敬公廟」69%、「セトノベルティ」50%、「窯垣の小径」47%となり、全体よりもその割合は高くなります。また、「六角陶碑」は「よく知っている」人の48%がPRしたいものとしてあげており、窯垣の小径よりも多くなっています。

なお、「旧山繁商店」及び「本地大塚古墳」は、よく知っている人でもPRしたいものとしてあげた人は11%にとどまっている状況です。



(2) 文化財保存の現状と課題

瀬戸市における文化財は、指定文化財については文化財保護法、愛知県文化財保護条例、瀬戸市文化財保護条例および関係法令・規則などにに基づき、その保存に努めています。

その他の未指定文化財については、前章までに示したように、瀬戸市の歴史・文化・自然、やきものに関わる様々な文化財、職人文化や祭りなど多様な形態があります。こうした未指定文化財を適切に把握するとともに、その保全措置についても検討する必要があります。

ア 文化財への住民意識の現状と課題

市民アンケート調査によれば、瀬戸市の歴史文化について「魅力がある」と回答した人は50%を超えています。また、その保存・活用についても88%の人がおおむね重要であると回答しており、市民の歴史文化に対する意識は高いものと考えられます。しかしその一方で、保存・活用について「協力できることはない」と回答した人が24%と多く、協力できることとして最も多かったのは「イベントや祭りなどへの参加」でした。

この結果からみて、市民の多くは瀬戸市の歴史文化を大切にしたいという意識があると同時に、歴史文化の具体的な内容は十分に理解できていない状況にあると考えられます。身近な祭りやイベントへの参加意欲は高いことから、歴史文化が特別なものではなく身近なものとして理解されれば、保存・活用についても意欲的な参加が見込まれます。多様な情報発信やまち巡りなどを通してより理解を深めていく必要があります。

【課題の整理】 ○文化財に対する市民の意識の向上

イ 指定文化財保存の現状と課題

現在の指定文化財は、国指定14件、県指定10件、市指定52件で、ほかに登録文化財が11件(3ヶ所)あります。保存の主体は所有者もしくは管理者となっていますが、無住の社寺や共有物などは地域の氏子や自治会が管理を行っています。その保全や修繕に関しては国・県・市ともに補助制度があり、必要に応じて補助金が交付されます。また、補助金交付にあたっては、保全方法・修繕内容を専門家を交えながら文化財保護機関と協議して進めています。しかし日常的な管理・保全については所有者・管理者の負担で行っており、共有物件などでは充分管理できない場合も起こりえます。また、祭りなどの無形文化財については、地元自治会や祭り団体が主体となっていますが、中心的な役割を担う人の高齢化や新住民の増加など伝承が困難となる要素もみられます。こうした問題は、所有者や主体者だけでは解決することは難しいため、文化財保護機関や専門家と地域住民が協議をして解決策を探る必要があります。

災害時の保存状況の把握などは市の文化財保護担当が行いますが、日常的な保存状況の把握や対応については定期的なものとしては確立されていません。こうした日常的な保全体制について、自治会や所有者のみでなく、文化財に関心の高い地域住民による日常的な見回りや、所有者・管理者との意思疎通が必要となってきます。また、保管方法や修繕等の必要性、その手法など専門家の意見や指導を必要とする場合もあります。所有者・管理者、専門家、行政間などで情報を共有し、適切な保存措置ができる仕組みが必要となります。

【課題の整理】 ○日常的な保存状況の把握と保全体制の確立
○所有者・管理者、専門家、行政間などでの情報の共有

ウ 未指定文化財の現状と課題

未指定文化財については、その全体的な把握とそれぞれの分野特性に応じた取り組みが必要です。

1) 建造物

瀬戸らしいまちの景観を形成する要素として窯業関連施設や民家がありますが、その多くは未指定であり、老朽化や現在の生活様式との乖離から滅失する可能性を有しています。所有者に残したいという思いがあっても、保存・管理や改修に関する負担、後継者がいないといった課題があります。また、居住者が死亡し、相続された住宅等が空き家のまま放置されるケースも増加しています。

まちの景観を形成する建造物について、その価値を明らかにするための調査を行い、指定・登録を進め、都市計画部局の指定する景観重要建造物等と連携するなどして保存活用を進めることが重要です。

2) 美術工芸品

美術工芸品は、個人や社寺、博物館、美術館等の所有となっている場合がほとんどで、公的機関が保管しているもの以外はその所在や保存状況が十分には把握されていません。また、瀬戸市では建物に附属する陶壁や構造物に装飾として設置された陶磁器など、不動産的な美術工芸品も多数みられます。

美術的に価値の高いものや瀬戸市の歴史や窯業史にとって重要なものについて、その実態を把握するとともに、指定化を含めた保存方法を検討する必要があります。これまで、その把握は市史編纂に伴う社寺調査など一部の分野に限られていました。広く情報を収集するために、市民からの情報提供など調査手法も検討して進めていく必要があります。

3) 古文書

窯業関係をはじめとして、未指定の古文書は個人所有のものが多く、失われてしまう可能性があります。所在の再確認や保存状態の把握は早急な対応を必要としています。また瀬戸市史編纂等で市が収集した史料も未整理・未公開のままとなっており、専門職員を配置した対応が必要となっています。

4) 有形民俗文化財

石造物や建築物など地域の祭祀や信仰の対象となっている文化財について、民俗調査等でその所在や由来が明らかになっているものや指定文化財となっているものもありますが、いまだ未調査のものもみられます。また、地域で保管される祭りの道具類や幔幕^{まんまく}などは、祭りの衰退とともに保管されなくなり、廃棄される場合もあり、地域ごとの保管状況を把握する必要があります。専門職員を配置した対応が必要となっています。

また、地域での保管が困難となった場合、民俗資料として資料館等での保管も必要となってきますが、現状では収蔵スペースに限りがあり、将来的な整理・保管方法についても検討する必要があります。

5) 無形民俗文化財

地域で行われている伝統的な祭りは、地域の人々の人的・金銭的負担によって継続されていますが、高齢化や人口減少により、後継者が不足し、これまで祭りを担ってきた人々の負

担が増加しています。

市民の半数以上が転入者という状況の中で、転入者が新たな担い手として祭りに参加できるような状況をつくりあげていく必要があります。

6) 埋蔵文化財

これまでも埋蔵文化財の保護として、文化財保護法に基づく各種届出の徹底や事前の試掘調査など、開発行為に伴う保存措置に重点をおいて進められてきました。開発に伴う調査に対応するため、愛知県内の市町村では初めて埋蔵文化財センターを設置し調査を行っています。しかし、現状では出土資料の収蔵スペースに制約があり、将来的な整理・保管方法を検討する必要があります。

7) 史跡

市内には現在史跡指定されているもののほかに、瀬戸市の歴史や窯業史を知る上で貴重な埋蔵文化財が多数あります。現在残っているものも将来の開発行為で滅失する可能性があり、史跡指定を進めていく必要があります。

8) 名勝

未指定の名勝としては、「尾張名所図会^{ずえ}」に掲載されている自然景観や寺社の庭園、公園などがあり、その現状の把握を進める必要があります。また、周辺の景観を含めた保全方法を考えるため、名勝の立地や周辺環境の調査も必要です。

9) 天然記念物

未指定の貴重な植物や名木は、市内の丘陵地に多くみられます。従来こうした植物や樹木は、採集や伐採のおそれがあるとして、なるべく周知せずに保全が図られてきました。しかし、丘陵地における小規模開発や林地保全のための管理により意図せずに伐採される場合や、林地管理が行われないことによる環境悪化で枯死する危険性があります。貴重な植物の生育場所の把握と計画的な保全方法の検討が必要となっています。また、周知方法についても検討する必要があります。

- 【課題の整理】
- 未指定文化財の実態把握及び調査方法の検討
 - 文化財の所在の再確認・保存状態の把握、収集資料の公開
 - 文化財・文化遺産所有者の負担軽減
 - 文化財・文化遺産の次世代への継承
 - 指定・登録の推進
 - 保存・継承の担い手の負担軽減及び新たな担い手の育成

エ 文化財の周辺環境保全の現状と課題

文化財、特に建造物や史跡、天然記念物などは周辺環境とともに保全されることでより価値が高まります。文化財周辺の景観・環境については都市計画法や景観法などと連携して保存を図っていく必要があります。瀬戸市景観計画では瀬戸地区、水野地区、品野地区、赤津地区を「せと・やきもの景観ゾーン」とし、洞地区を「景観重点地区^{ほら}」に指定しています。また洞地区内の宝泉山山門ほか10件の建築物を「景観重要建造物」に指定しています。丘陵

地についても「森林里山ゾーン」として景観の保全が図られています。

こうした景観保全と併せて、文化財の価値を損なわない保全方法を検討する必要があります。

【課題の整理】 ○文化財周辺の景観・環境の保存
○文化財の価値を損なわない保全方法の検討

オ 文化財の防犯・防災に関する現状と課題

文化財の防犯・防災については、所有者や管理者の日常的な取り組みの中で行われています。しかし近年は、文化財の人為的な破壊や窃盗・火災が増加しており、指定文化財を中心に防犯・防災体制を強化する必要があります。

文化財の防災については、災害予防、応急対応、災害復旧の段階ごとに必要な対応があります。

1) 災害予防

瀬戸市地域防災計画では、文化財に対する平常時の対策として「文化財防災台帳」の常備と所有者・管理者への防災知識の普及を図るため「文化財の防災の手引き」等の発行・指導を行うよう規定しています。この台帳は指定文化財のみを対象としています。これを未指定文化財も対象として整備することで、文化遺産全体を対象とした防災計画の基礎資料として利用できます。また文化財ごとに所有者・管理者と協議して災害時の迅速な対応ができる体制を定めておく必要があります。

2) 応急対応

市内に甚大な被害を及ぼす災害が発生した場合、行政・文化財所有者・管理者とも人命を最優先とした災害対応を行うこととなります。文化財に対する対応は災害復旧段階から本格化するものと考えられますが、それまでに文化財の被害状況の把握や被災文化財の一時的な保管が必要となる場合が考えられます。文化財に対応した災害行動計画(タイムライン)を作成し、応急対応時の文化財保管場所(ミュージアム・美術館等)等を定めておく必要があります。

3) 災害復旧

被害に遭った文化財の補修や復元は、所有者や管理者のみでは対応が困難で、文化財保護部局が主体となり、専門家に指導や意見を求めて対応する必要があります。また、被害規模や状況によっては市のみで対応することが困難な場合もあります。国・県はもちろんのこと、ほかの自治体や企業等へ協力を要請するなどの措置が必要となります。

また、補修や復元のためには、現在の文化財の形状や構造のデータが必要となります。「文化財防災台帳」には、こうしたデータを含めた文化財に関する詳細な記録を行い、掲載しておくことも重要です。

【課題の整理】 ○防犯・防災体制の強化
○文化財防災台帳の作成及び所有者・管理者への防災知識の普及
○災害時における被害状況の把握と被災文化財の一時的な保管
○被害の状況にあった補修や復元

(3) 文化財活用の現状と課題

ア 指定文化財等の展示施設

文化財・文化遺産を収蔵・展示する施設としては、下表のようにやきもの関連の施設が充実していますが、やきもの以外の収蔵・展示施設はほとんどないのが現状です。

これらの施設の中でも瀬戸蔵ミュージアムと愛知県陶磁美術館は、指定文化財や貴重な陶磁作品の見るができる場所として親しまれています。両施設は、企画展開催案内にお互いのイベント情報を掲載したり、共同展示会、職員交流などを行ったりしています。瀬戸市と愛知県と設置主体は異なっていますが、瀬戸市における重要な施設であり、今後とも連携した取り組みを展開していくことが重要です。

なお、瀬戸蔵ミュージアムは開館後 10 年が経過し、常設展示のリニューアルや増加する収蔵品に対する収蔵スペースが課題となっています。

【課題の整理】 ○展示施設の充実と積極的活用

■文化財・文化遺産の収蔵・展示施設の概要

	概要	主な収蔵品
瀬戸蔵ミュージアム	- 瀬戸市歴史民俗資料館の機能を継承・発展させ、平成 17 年に開館。 - やきものづくりを核に瀬戸の特徴的な建物の復元や窯業関連道具の展示、1000 年余の歴史をもつ瀬戸焼の歩みなどを紹介。	- 国指定文化財「瀬戸の陶磁器の生産用具及び製品」 - 県・市指定文化財の瀬戸焼や瀬戸地域の遺跡出土資料
愛知県陶磁美術館	- 世界に誇りうる陶磁文化の殿堂をめざし、愛知県政 100 年記念事業として、昭和 53 年に愛知県陶磁資料館を開館（全館完成は平成 6 年）。 - 平成 25 年に 35 周年を迎えたことを機に「愛知県陶磁美術館」に名称変更。	3 点の重要文化財を含む 7,020 点（平成 27 年 3 月末）となり、国内屈指の陶磁専門ミュージアムとして成長
瀬戸市美術館	陶磁器をはじめ、絵画、彫刻等美術作品全般の企画展示を行う。	瀬戸市にゆかりの深い作家の作品を中心に 1,000 点を数える。
新世紀工芸館	- 次世代につながる陶芸とガラス工芸をテーマにした施設。 - 展示棟は瀬戸の陶磁器産業の隆盛期を迎える原点となった旧瀬戸陶磁器陳列館を再現。	3 つの展示ギャラリーを設け、企画展示を中心に常に新しいかたちで創作に取り組むアーティストの活動を紹介
瀬戸染付工芸館	「瀬戸染付」をはじめとするやきもの文化やロクロや絵付などの作業風景の公開、瀬戸染付の名品の展示。	市内唯一の古窯（市指定文化財）を保存・公開
ノベルティ・こども創造館	- ノベルティを製造していた民間の工場を改修して、平成 15 年に開館。 - セトノベルティの文化や技術を見学・体験できる施設。	セトノベルティの名品やバラエティ豊かな製品
招き猫ミュージアム	- 招き猫専門の民間博物館。 - オリジナル招き猫をつくる染付体験もできる。	「招き猫」数千点を展示
山口郷土資料館	平成 8 年に山口自治連区の独自の活動により設立。山口の歴史の紹介とともに、伝統行事の継承、保存の役割を果たす。	「山口の警固祭り」標具の等身大の模型など

イ 伝統的な建物・古民家等の活用

伝統的な建物や古民家・文化遺産の活用・公開事例としては下記のようなものがあります。窯垣の小径や中心市街地において活用が行われていますが、一部にとどまっており、文化財・文化遺産の魅力に触れる機会は少ないのが現状です。

- 【課題の整理】
- 文化財・文化遺産に触れる機会の創出
 - 地域活性化にむけた文化財・文化遺産の活用
 - 民間企業等による活用の推進

■伝統的な建物・古民家・文化遺産の活用・公開事例(瀬戸市内)

	名 称	概 要
公的施設	窯垣の小径ギャラリー	・江戸期に建築された窯元の屋敷 ・洞町で活躍する作家の作品を中心に不定期で企画展を開催
	窯垣の小径資料館	・本業焼の窯元であった旧寺田邸を改修 ・本業タイルをはじめとした歴史・文化及び現在の洞町の紹介&休憩所
	北川民次アトリエ	・大正10年頃に建てられた陶器工場を改造。北川民次が昭和18年から25年間このアトリエで省制作。 ・平成6年に守る会が結成され、年2回春と秋に一般公開しながら保存に努めている。
	竹露庵	・名古屋幅下の某家にあった茶室を明治初期に移築。 ・お茶会に活用できる。
	馬ヶ城浄水場	・昭和8年に竣工した瀬戸市で最も古い浄水場。貯水池から流れ落ちる水は、コンクリートダムでは珍しいレース状の鱗模様を描く。管理棟は瀟洒な洋館の意匠でまとめられた趣のある歴史的建造物。毎年6月に一般開放が行われる。
民間施設	久米邸	・近代瀬戸窯屈指の窯元であった川本枳吉の別邸で明治41年(1908)に建造された木造2階建寄棟造建物で、昭和23年(1948)には久米逸郎氏の手に渡り眼科医院として昭和55年まで使用された。現在は古民家カフェとして活用。
	丸一国府商店	・江戸期から陶器の卸売り・小売りを続けている。旧犬山藩の家臣たちのために興された丸一商店の陶磁器仕入れ部門が瀬戸に進出する中で、明治44年(1914)に建造された商業建築の典型とされる。木造2階建で入母屋造の望楼を付して4層をなす。(店舗部分以外は非公開)



竹露庵



丸一国府商店

2 文化財の保存活用の基本的な考え方と方針

(1) 基本理念

千年以上も連綿とやきものをつくり続けているまち「瀬戸」。その歴史の積み重ねが現在の瀬戸のまちをつくり、「せともの」はやきものの代名詞ともなりました。

瀬戸でやきものが発展した背景には、良質な粘土や森の木・水などの豊かな自然に恵まれていたことや尾張、三河、美濃の三国の境に位置するという立地条件があり、多くの先人の努力や工夫によって、様々な苦難を乗り越え、イノベーションを繰り返し、新たな道を切り開いてきました。

このような歴史はこれからの瀬戸を考える上でも重要なポイントであり、瀬戸特有の歴史文化を大切にし、その魅力をさらに高め、有効に活用することによって、歴史と伝統ある「やきもののまち」に住む市民が、誇りと愛着を持てるまちづくりを進めていくことが重要です。

以上を踏まえ、瀬戸市における歴史文化の保存・活用にかかる基本理念を以下のように設定し、市民の主体的な参加により、瀬戸市の歴史文化の魅力を発信していくとともに、新たな魅力を創出します。

**千年以上のやきものの歴史の積み重ねを次代に活かし、
市民とともに新たな魅力を創造する**



六角陶碑

(2) 基本的な考え方

瀬戸市における文化財・文化遺産の現状と課題を踏まえ、次に掲げる基本的考え方により、市民の主体的参加を得ながら、「千年以上のやきものの歴史の積み重ねを次代に活かし、市民とともに新たな魅力を創造する」という基本理念の実現をめざします。

ア 文化財・文化遺産の総合的把握と価値の共有化

市域にある多様な文化財・文化遺産を総合的に把握し、その魅力をわかりやすく提示することで、文化財・文化遺産の価値の共有化を図ります。

イ 文化財・文化遺産の適切な保存・管理

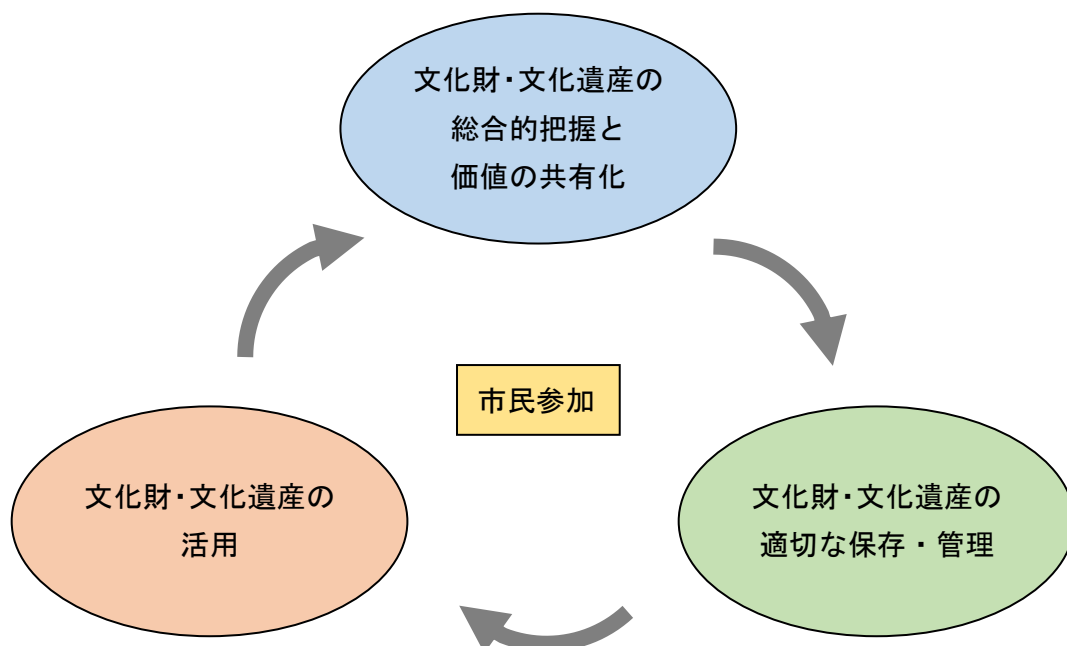
瀬戸市の魅力をつくる市民共有の財産として文化財・文化遺産の適切な保存・管理を図るとともに、文化財・文化遺産の継承を図るための担い手を育成します。

ウ 文化財・文化遺産の活用

文化財・文化遺産の魅力を市民や市外在住者に知ってもらうとともに、保存・継承の支援者を生み出すため、それぞれの文化財・文化遺産の特徴を活かした活用を図ります。さらに、地域産業、まちづくりと一体となった文化財の活用など地域の活性化に活かしていきます。

瀬戸市の文化財・文化遺産の魅力情報を様々な形で発信することで、市民の愛着、誇りを醸成するとともに、市外からの誘客を図ります。

この3つは、それぞれが関連しながら、価値の共有化が保存・管理の原動力となり、適切な保存・管理が活用につながり、魅力的な活用が価値の共有化を広げるというような循環を生み出すよう、継続的に取り組んでいきます。

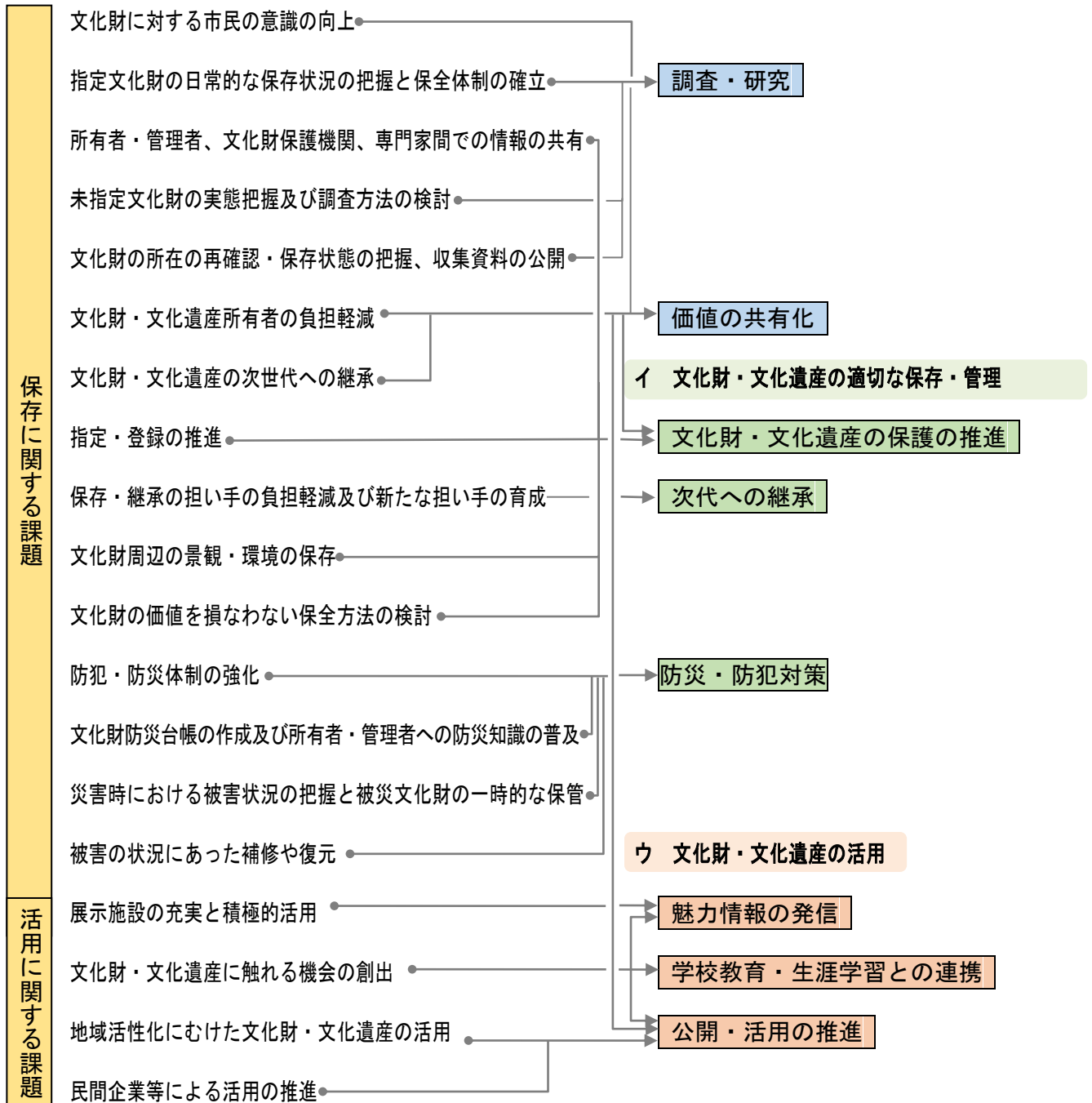


(3) 方針

保存・活用の課題

基本的考え方・方針

ア 文化財・文化遺産の総合的把握と価値の共有化



ア 文化財・文化遺産の総合的把握と価値の共有化

1) 調査・研究

●文化財把握のための調査・研究の実施

広く文化財の把握に努めます。特に、瀬戸市の文化遺産の最大の特徴である窯業遺跡について、各時代や地区を代表する窯跡群の確認調査を実施し、その残存状況や遺跡内容を把握し、開発行為に関わる部署や開発業者にも周知していきます。

●施設・専門職員の充実

調査・研究や保存・公開を進めるための施設の充実・専門職員の充実に努めます。

●住民と行政がともに行う調査の実施

地域の民俗調査については、地域住民自身が調査者となって記録し、地域内で共有できる仕組みを構築します。さらに、小中学生が調査に参加することなどにより、次代の継承者を育成します。

●文書資料の調査データの公開

文書資料については、その調査データをアーカイブ化し、公開することが、資料の分析を進める上でも重要です。

2) 価値の共有化

●歴史文化データベースの構築

文化財防災台帳と連携した歴史文化データベースを構築し、公開可能な部分については積極的に情報発信を行っていきます。

●特別公開等による価値の再確認

まちめぐりも含めた「せと歴！（瀬戸の歴史と文化財を知る見学会）」などを開催し、文化財建造物等の特別公開を進め、文化財・文化遺産の価値を市民に再確認してもらい、市民共有の財産としての価値を共有化していきます。

●小中学生を対象とした文化財の魅力に触れる取り組みの展開

小中学生の頃から文化財・文化遺産に親しみ、保存・活用の担い手を育てていくため、小中学生を対象とした文化財の魅力に触れる取り組みを展開します。



第6回まちめぐり 今村地区



第3回せと歴！ 陶祖公園

イ 文化財・文化遺産の適切な保存・管理

1) 文化財・文化遺産の保護の推進

●文化財指定・登録の積極的推進

貴重な文化財・文化遺産の保存・継承を図るため、指定や登録を積極的に推進します。

特に、窯業遺跡については、関連文化財群として広久手第 30 号窯跡、幡山地区古窯跡群、馬ヶ城地区古窯跡群、赤津古窯跡群、昔田窯跡、月山窯跡、穴田古窯跡群、夕日 4 号窯跡、桂蔵窯跡、洞窯跡・東洞窯跡(窯跡の杜)などがあり、内容確認のための試掘調査を順次実施し、土地所有者や採掘権者等と協議を進め、史跡指定を行っていきます。

●保存活用計画の策定の推進

指定・登録文化財の現状と課題を把握し、保存・活用を図るために必要な事項や、所有者等が自主的に保存・活用のために行うことのできる範囲等を明らかにするための保存活用計画の策定を進めます。

●文化財・文化遺産の保存・修理

文化財・文化遺産の保存・修理が必要です。そのため、文化財(特に未指定)所有者に対する啓発とともに、文化財所有者による保存・修理に対する支援を行います。

●収蔵スペースの確保

増加する収蔵品に対する収蔵スペースを確保します。

●文化財の周辺環境を含めた保全の推進

文化財周辺の景観・環境について景観計画などと連携し、保全を図ります。

歴史的建造物については、建物単体でなく、街路や街路沿いの構造物等を含めて保全するために、景観を構成する要素を抽出し、それぞれについて保全を行います。

樹木については、地域の名木について景観計画に基づく「景観重要樹木」への指定を進めるとともに、丘陵地内における貴重な自然林については、天然記念物指定等を土地所有者や環境保全部局と協議して進めます。

●歴史文化保存活用区域の設定

中心市街地や洞地区など関連文化財群が集積する地区を歴史文化保存活用区域として設定し、まちづくりと連携した重点的取り組みを展開します。

2) 次代への継承

●地域ぐるみでの保存・継承

地域の人々が中心となって文化財・文化遺産の保存・活用に取り組んでいくためのアダプトプログラム(市民が愛着を持って文化財の維持・管理に参加し、それを行政が支援する制度)やサポーター制度等のしくみづくりを推進します。

●伝統技能者の育成

瀬戸市の歴史文化に関わる技術を継承する伝統技能者を育成します。

3) 防犯・防災対策

●防犯・防災体制の強化

公開されている文化財については防犯カメラの設置や見回りの強化を促し、地域の防犯組織や防火組織、警察署や消防署にも協力をお願いしていきます。また、消防設備や機械警備などの防火・防犯装置が設置されている場合は、機器が充分機能しているかどうかの点検を行い、適切に機能するよう促します。

●地域との連携による防犯対策の推進

防犯パトロールなど地域との連携による防犯対策により、文化財を放火や盗難などの犯罪から守ります。

●文化財建造物の耐震対策の推進

文化財建造物の耐震性の調査を行い、次世代に確実に継承していくための耐震対策を行います。また、文化財防火デー等の折に行われる防災訓練を積極的に行うことにより、文化財所有者・管理者・周辺住民等の防災技術と意識の向上を図ります。



桂蔵窯跡確認調査の現地説明会



文化財防火デー(定光寺)

ウ 文化財・文化遺産の活用

1) 魅力情報の発信

●展示施設の充実及び連携による魅力発信

各展示施設の充実を図るとともに、各展示施設の特性を活かした連携により、新たな視点から瀬戸市の歴史・文化の魅力を伝えていきます。

●案内板・説明板の整備

来訪者に対し、文化財・文化遺産の所在をわかりやすく伝え、誘導する案内板や歴史文化の魅力を的確に伝える説明板を整備していきます。そのためのデザインの統一やデジタルサイネージ(映像装置を利用した案内表示)の導入を図ります。

●歴史文化ストーリーの魅力発信

関連文化財群のストーリーごとの特性を踏まえ、その魅力をPRしていきます。

さらに、地域をまたぐ複数の文化財を巡るしかけとして市民参加による歴史文化ストーリーごとのまち巡りコースの設定を行うとともに、マップの作成・配付や市民がその案内をすることによって、ストーリーの魅力を体感できるようにします。

●ボランティアガイドの育成

瀬戸市の歴史文化の魅力を伝えるため、文化財・文化遺産を案内するボランティアガイドを育成します。

●市民による情報発信の強化

SNS(TwitterやFacebook等)などを活用し、市民による情報発信を強化していきます。

2) 学校教育・生涯学習との連携

文化財・文化遺産に関する広報活動を推進するとともに、文化財・文化遺産を活用した学校教育・生涯学習との連携を図ります。

3) 公開・活用の推進

●文化財の公開による普及啓発の推進

有形文化財建造物の魅力を市民に知っていただくため、普段公開されていない建造物についても公開の場を設けたり、その魅力を感じていただけるような活用を進めます。そのためには、文化財所有者による公開・活用に対する支援を行います。

●民間事業者による活用の推進

所有者自身による保存・活用が困難となった文化財については、その価値を理解し、活かすような方策を考えることのできる民間事業者の活用を進めます。

●地場産業の振興につながる文化財の活用

窯めぐりややきものづくり体験などに、窯業関連文化財の見学や伝統的陶芸技術の体験を組み合わせ活用することで、地場産業の振興につなげていきます。また、空き家となっている古民家や窯業関連施設などを「ツクリテ」の住まいや工房として活用することにより、移住につなげていきます。

●まちづくりとの連携

文化財・文化遺産をまちづくりの拠点施設として活用するなど、まちづくりと連携した取り組みを進めます。陶磁器卸問屋であった旧山繁商店は中心市街地の歴史的景観の核となっており、来訪者の回遊や交流の拠点として、保存修理を行い、公開活用を図っていきます。

第5章 歴史文化基本構想の実現に向けて

1 歴史文化基本構想を推進する体制の確立

(1) 歴史文化に関わる各主体の役割

構想の推進にあたっては、所有者・管理者、市民、市民団体・関連団体・民間企業、専門家・学識経験者、行政などが協働・連携して取り組んでいくことが重要です。ここでは、各主体の役割を整理しておきます。

ア 文化財・文化遺産の所有者・管理者の役割

貴重な地域の歴史と伝統文化を象徴する地域の財産である文化財・文化遺産を大切に保存し、次代に継承していくとともに、可能な範囲においてこれを公開するなど、その活用を推進する役割が期待されます。

イ 市民の役割

身近な地域の歴史文化に関心を持ち、歴史文化に触れることによって、文化財・文化遺産の価値を共有するとともに、まちの財産として次代に受け継いでいくため、維持管理や活用など、文化財・文化遺産を活かしたまちづくりへ主体的に参加する役割が期待されます。

ウ 市民団体・関連団体・民間企業の役割

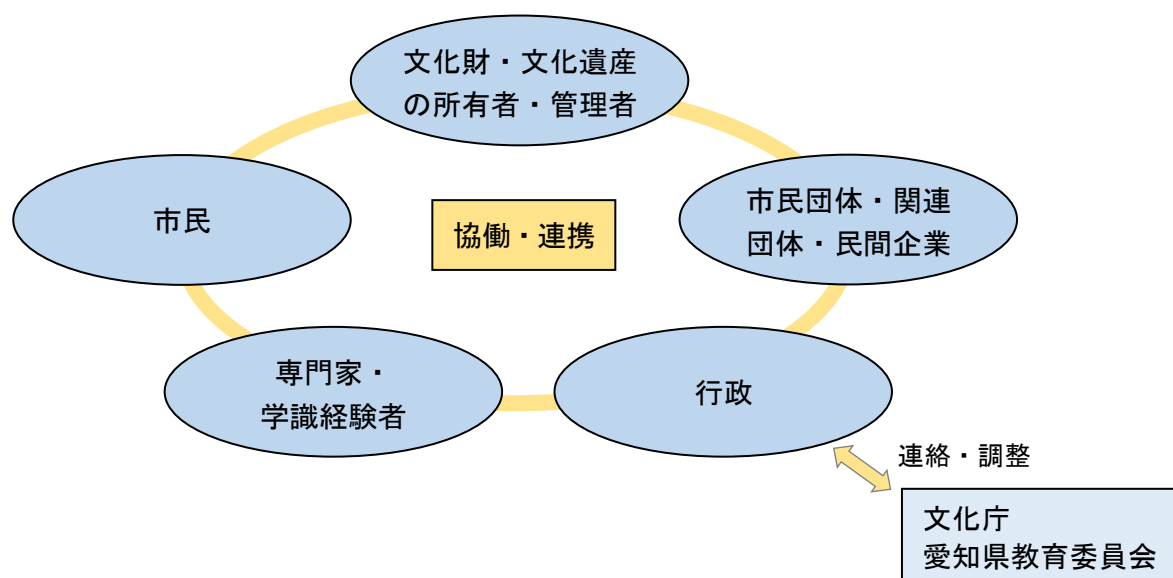
それぞれの活動を通じて、文化財・文化遺産の魅力を伝えていくとともに、その積極的な活用をはじめ、文化財・文化遺産を活かしたまちづくりを推進する役割が期待されます。

エ 専門家・学識経験者の役割

専門知識を活かし、文化財・文化遺産の調査・研究に協力し、指導・助言を行うとともに、所有者等による維持管理や活用を支援する役割が期待されます。

オ 行政の役割

文化財・文化遺産の保存・活用の方向性を示し、調査研究を行い、文化財・文化遺産に対する意識の高揚を図るとともに、所有者や市民団体等による維持管理や活用を支援するなど、文化財・文化遺産を活かしたまちづくりを推進する役割を担います。

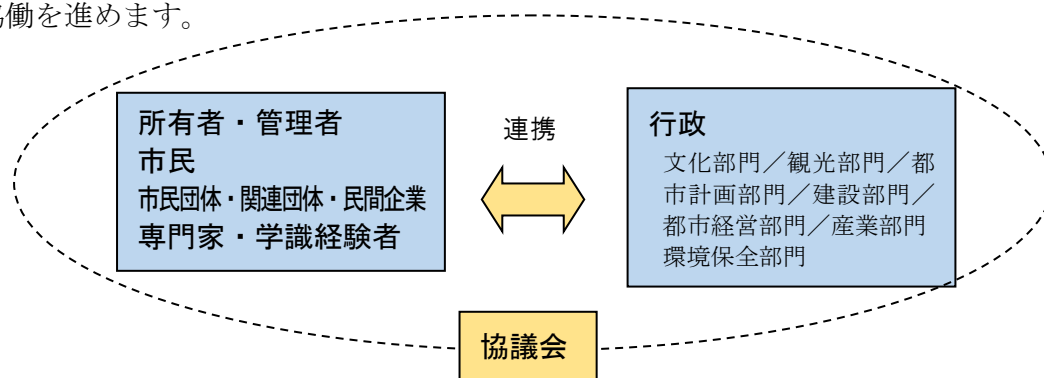


(2) 推進体制

ア 市民や関連団体との連携

1) 協議会の設置による情報の共有化と連携した取り組みの推進

所有者・管理者、市民、市民団体・関連団体・民間企業、専門家・学識経験者、行政などがそれぞれの役割を明確にし、瀬戸市の文化財・文化遺産の保存活用についての情報を共有化し、連携した取り組みを推進するため、歴史文化に関わる市民や団体を構成員とする協議会を設置します。歴史文化基本構想の内容を周知するとともに、市民や様々な団体との連携・協働を進めます。



2) 瀬戸の魅力を発信するボランティア活動の展開

「瀬戸観光ボランティアガイド」や愛・地球博の成果を活かして活動している「おもてなしボランティア」などは瀬戸市の歴史文化を来訪者や市内外に伝える上で重要な役割を果たしています。この活動を発展させるためには次代を担う若い人に参加してもらうことが重要です。若者が興味を持つようなSNSを活用した瀬戸市の魅力発信の仕組みをボランティアの活動に取り込み、市民との連携により瀬戸市の歴史文化の魅力発信をさらに強化していきます。

イ 庁内体制の充実

1) 専門職員の充実

瀬戸市の歴史文化の魅力を伝えていくとともに、その価値をしっかりと把握し、広めていくため各分野の専門職員の充実・育成を図ります。

2) 職員の瀬戸市の歴史文化に対する理解向上

瀬戸市職員が一丸となって瀬戸市の歴史文化の魅力を伝えていくため、瀬戸市の歴史文化について知り、学ぶ職員研修を行います。せとの学び塾やまちめぐりに、職員が積極的に参加するよう促します。

3) 関係部局との連携

歴史文化に関わる関係部局によるプロジェクトチームを結成します。現在、各部局でバラバラに実施している看板(サイン)について、そのデザインの統一など連携した取り組みを進めるとともに、所管課事業の明確化により役割分担を行い、定期的な会議の開催によって進行管理をしていきます。さらに、今後の新たな取り組み施策の検討や構想の見直しについても検討します。

2 今後の課題

(1) 構想の市民への周知

瀬戸市歴史文化基本構想の策定により、瀬戸市の歴史文化の多様な魅力・価値を顕在化することができ、文化財保護行政を進めるための基本的な方針を示すとともに、「やきもののまちとしての地域資源を活かしたまちづくり」を推進していくための方向性を示しました。

市民の主体的参加によって本構想の推進を図っていくためには、本構想を市民に周知し、策定の意義及び瀬戸市の文化財・文化遺産の魅力を知ってもらうことが重要です。

そのためには、本構想の内容をわかりやすく解説するほか、学校教育や生涯学習の場で活用する等の取り組みを進め、周知・理解に努めていく必要があります。

(2) 文化財・文化遺産の保存・活用に向けた計画の策定

本構想で示した方針に基づき、瀬戸市の文化財・文化遺産の保存・活用を具現化していくためには、その取り組み内容を明確にしていくことが求められます。

そのためには、まちづくりに関わる諸政策との連携が重要です。「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律(歴史まちづくり法)」に基づく「歴史的風致維持向上計画」の策定は本構想と連動して策定することが望ましい計画として位置づけられており、計画策定を検討する必要があります。

(3) 周辺都市との連携

本構想では瀬戸市域にある文化財・文化遺産を対象としていますが、歴史文化は瀬戸市域で完結しているわけではなく、周辺部に関しては、むしろ市外にある文化財・文化遺産を含めた展開を図ることでより魅力が高まります。また、「瀬戸」や「美濃」、「関」や「燕三条」の企業が連携して開発した「セラミック包丁」のように、地域連携によって世界が注目するブランドが生み出されている事例もみられます。

瀬戸市と同じく「陶都」と呼ばれている多治見市、土岐市、瑞浪市など東濃地域と県境をまたいで連携することにより、さらに多様なやきものの魅力を感じることができると考えられます。

また、公共交通を利用する来訪者の視点からみると、利用する駅や沿線を中心とする関連文化財群が設定されていると訪問しやすく、関心も高まることが考えられます。定光寺の最寄り駅であるＪＲ定光寺駅のある春日井市、愛知県陶磁美術館へのアクセスとなるリニモ沿線の長久手市との連携が考えられます。

(4) 広域的な連携

瀬戸は中世から現在まで生産が続く六古窯^{ろっこよう}の一つです。日本六古窯サミットが開催されていますが、さらに連携を深め、関連文化財群としてその魅力をPRしていくことが考えられます。

また、各地の大名が瀬戸から招いた陶工が創始となったやきものの産地(会津本郷焼、越中瀬戸焼など)も多くあります。また、陶祖^{とうそ}藤四郎がやきものの技法を学んだと伝わる中国杭州市・寧波市^{ねいはい}、磁祖^{じそ}民吉が修業した長崎県北松浦郡佐々町や熊本県天草市など様々な地域との交流の中で瀬戸市のやきものは広がっており、これら都市との連携・交流を深めることがせとものの特徴をより際立たせ、瀬戸市の魅力を高めることにつながると考えられます。

(5) 構想の見直し・更新

今後の調査・研究により、瀬戸市を象徴する新たな歴史文化遺産が明らかになった場合等は、それらを本構想で設定した関連文化財群として位置づけることが求められます。また、時代の経過に伴い、社会的状況や価値観の変化などへの対応や文化財・文化遺産の保存・活用の取り組みの進展により、構想の一部見直しが必要となることも予想されます。

そのため、一定期間経過後、市の総合計画の見直しなどに合わせ、広く市民の意見を反映しつつ、内容の更新を図っていく必要があります。

第6章 歴史文化基本構想を活かした今後の展開

瀬戸市ではこれまで、都市戦略の要としての「せと・まるっとミュージアム」を通して、歴史と伝統ある「やきもののまち」に住む市民が、誇りと愛着を持てるまちづくりを進めるとともに、催事等を通して市民のみなさんが、おもてなしの心を持ち、互いに交流し、学ぶことにより、躍動感に満ちたまちづくりを図ってきました。

今後、この「せと・まるっとミュージアム」の取り組みを更に進化させ、歴史・文化・観光・産業など市民の営みによって築き上げられた有形・無形の財産を活用するとともに、瀬戸市ならではのストーリー(物語)を構築し、発信することにより、“せとまちブランディング”の一端を担い、瀬戸市の認知度やイメージの向上を図り、まちの賑わいや地域の活性化に向けて、次の施策に取り組みます。

瀬戸市の将来像

住みたいまち

わたしたちのまち瀬戸には、今住んでいる人だけでなく、瀬戸にある企業に働きに来る人、瀬戸に遊びに来たり、買い物したりする人……いろいろな人がいます。

今住んでいる人にとってこれからも“住み続けたい”と思えるまちに、新たに暮らしを始める人にとって“住みたい”と思えるまちに。

瀬戸のまちが、そう思えるまちになっていくことへの想いが込められています。

誇れるまち

わたしたちのまち瀬戸には、1000 年余の歴史と伝統をもつやきものの文化と、多くのやきものを生み出してきた大地とそれを囲む豊かな森林といった自然環境があり、今日までそれを受け継いできた人々の知恵と温かさがあります。これらは世界に一つしかない、瀬戸市民が誇るべき財産です。

その財産を存分に活かし、誇りがすべての市民の胸の内にあり、瀬戸を訪れる人に魅力を感じさせるまちにしたいという想いが込められています。

新しいせと

やきもののまちとして始まった瀬戸は、常に新しいものづくりに挑戦する気概と風土にあふれています。歴史が移り変わり、多くの人が市外から移り住み、新しい技術が次々に生まれる時代となっても、その精神は生き続けます。

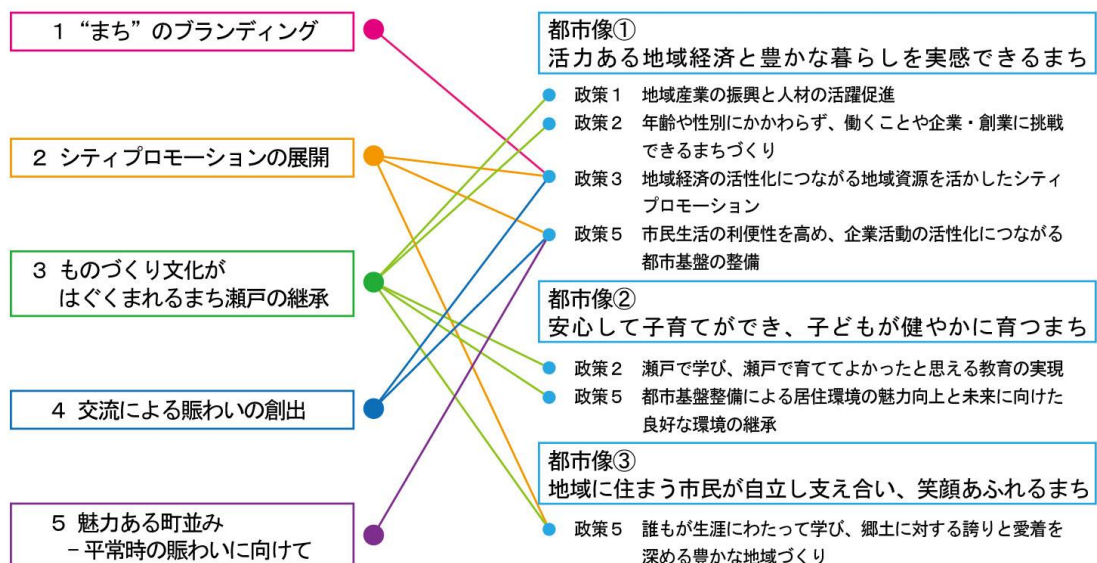
長い歴史が培った瀬戸の文化と伝統、技術を活かして、訪れる人をもてなしたり、日々の暮らしの中に匠の逸品を取り入れたりすることも、歴史とともに歩むまちづくりの一つの在り方です。

瀬戸をつくり、導いてきた先人たちの誇りと技術と知恵を受け継いで、わたしたち市民や企業、地域がともに新しい時代のまちづくりに挑戦する。

“新しいせと”には、そのような未来へ向けた想いが込められています。

歴史文化基本構想を活かした今後の展開

第6次瀬戸市総合計画



1 “まち”のブランディング

やきものの歴史や伝統、文化、豊かな自然環境をはじめとする瀬戸市固有の魅力や価値を国内外に打ち出すことで“まち”のブランド力を高め、将来像「住みたいまち 誇れるまち 新しいせと」の実現につなげます。

(1) せともの文化の魅力の発信

「せともの」はやきものの総称として日本全国に知れ渡っていますが、愛知県瀬戸市で作られていることはまだまだ知られていません。千年以上の歴史を有する瀬戸市が世界に誇るせともの文化を通して、ものづくり文化が育まれるまちの魅力を効果的に発信することで、国内外より知的好奇心を求める多くの観光客を呼び込みます。

作家や職人の協力を得て、その製作過程などをみていただくなど、瀬戸市のやきものの技術の高さを知っていただき、瀬戸市のやきものの魅力に気づいていただけるように努めます。



(2) 何度でも訪れたくなるまちづくり

瀬戸市の魅力を感じながら、瀬戸市の強みであるものづくりを体験することのできるツアー等を企画し、初めて訪問する人が瀬戸市のファンになるよう、瀬戸市ならではのメニューの充実を図ります。

地域に息づく伝統的な行事や祭りなどを観光資源に活用することで、観光メニューの裾野を広げ、何度でも訪れたくなるまちづくりを目指します。また、市外の観光資源との組み合わせや連携により誘客を促進します。

(3) “まち”のブランド力の向上

文化庁が推奨する「日本遺産」認定やユネスコ「創造都市ネットワーク」加盟への取り組み、海外における見本市、アーティスト・イン・レジデンス(国内外の芸術作家を瀬戸に招聘し、創作活動を行う)事業等、国内外に向けて情報発信を行い “まち”のブランド力を高めます。

(4) 新たな視点による観光の展開

産官学の連携により、ソフトウェアやロボットなど新産業分野を観光事業に取り込むことで、瀬戸市ならではのものづくり観光の新たな展開を図ります。

他産地や異業種と制作者(ツクリテ)をマッチングさせ、コラボレーションすることにより、付加価値の高い(観光)商品の開発につなげます。

2 シティプロモーションの展開

市民が歴史や文化等のまちの魅力を知ることにより、シビックプライドの醸成を図り、瀬戸市の良さを市民自らが発信することで、定住人口、交流人口の増加を目指します。

(1) シビックプライドの醸成

市民のみなさんが瀬戸市に対して「誇り」や「愛着」を持ち、自分もこのまちを形成している一人であるという認識を持ち、まちをよくするための取り組みに関わろうとする当事者意識＝シビックプライドの醸成を図ります。

瀬戸市に生まれ育った人も、新たに瀬戸市民になった人も、瀬戸市の魅力を知り、瀬戸市への誇りを醸成することを目標に、まちめぐりイベントの開催や市民参加型の体験プログラムの実施、あるいはボランティアガイドや観光講座への参加を促すことにより、市民のみなさんが改めて瀬戸市の産業・歴史・文化等に気づき、知り、学ぶ機会を設けます。

(2) 市外在住者に対するプロモーションの展開

愛知県等との連携によるアジアを中心とした海外へのプロモーション活動や首都圏での観光物産展への出展、旅行商品の造成(企画・実施)等を行い、国内外からの誘客促進につなげます。

瀬戸市の優れた地域資源を効果的に発信していくため、マスメディアや高度化する様々な情報媒体を使ってイメージ戦略を図るとともに、アンケート調査による分析により、市外在住者が瀬戸市に感じた印象などを把握し、効果的な情報発信に努めます。

(3) サインの整備

サインは情報インフラであり、シティプロモーションや町並み整備の上でも重要な役割を果たすことから、市民及び来訪者(外国人来訪者含)が施設等目的地へ円滑な移動が図れるよう、標識や案内板などの統一的なデザインの整備を進めていきます。

(4) 情報発信の強化

瀬戸市の観光PR用ホームページの充実を図り、若い世代への情報発信を強化します。市民や来訪者に瀬戸市の魅力を口コミやSNS(TwitterやFacebook等)で発信してもらえよう努め、瀬戸市のイメージ向上につなげます。

公衆無線LAN等の情報基盤整備を図り、市民や来訪者が情報収集・情報発信できる環境を整え、利便性を高めます。



3 ものづくり文化がはぐくまれるまち瀬戸の継承

瀬戸市にはやきものに関わるツクリテをはじめ、ガラスや木工、デザインなど幅広い分野で活動するツクリテが集まる土壌があります。瀬戸市の歴史文化の中核であるやきものを軸に、ものづくり文化がはぐくまれるまち瀬戸を継承していきます。

(1) ものづくり文化の集積

瀬戸市には、新しい“もの”をつくり出そうとする革新の気風とチャレンジ精神、職人魂がDNAとして受け継がれています。また、外的文化を“瀬戸ナイズ”して時代ごとに適応してきた土壌があることから、国内外からさまざまな分野の優秀な人材や産業を誘致し、人や技術を融合させることで、ものづくり文化の集積を図ります。

(2) ツクリテ支援

新世紀工芸館や瀬戸染付工芸館、愛知県立瀬戸窯業高等学校専攻科、愛知県立窯業高等技術専門学校など、多くのツクリテを輩出している施設があります。こうした若い作家やアーティストなどが活躍できるような支援を行うことによって、ものづくりの歴史を背景としたアートやクラフトのまちとしての個性を伸ばしていきます。

商店街や空き家所有者等との連携により、ツクリテに住まいと創作・事業活動の場を提供するとともに、情報提供や人材育成、交流ネットワークづくりなどきめ細かく支援をすることで、作家同士が技の交流を通じてお互いを高め合い、瀬戸市の新たな魅力を生み出します。

(3) ものづくりをしてみたいくなるまちの創造

「陶の路」沿線上において、景観形成建築物が残されていることから、空き家対策事業との連携により、ルートの魅力づくりを行い、回遊したくなるまち、ものづくりをしてみたいくなるまちを目指します。



4 交流による賑わいの創出

瀬戸ファンの拡大を図るとともに、それらの人々をもてなす体制を構築し、来訪者と市民の交流を深めることでまちの賑わいを創出していきます。

(1) 瀬戸ファンの拡大

ストーリー(物語)性を持たせた観光ルートを設定し、市内に点在する文化・観光資源や美しい自然、ものづくりの現場を巡る周遊型・体験型の観光を推進することにより、これまで以上に誘客を促進し、瀬戸ファンの拡大を図ります。

瀬戸市に魅力を感じていただいた人に、定期的に瀬戸市の情報を発信したり、商店街等との連携により来訪時サービスを充実させることで、瀬戸市への再訪を促します。

(2) 市民によるおもてなし

愛・地球博を契機に高まった市民力はおもてなしボランティア活動や市民活動を活発にし、様々な交流が広がっています。この市民力こそが瀬戸市の強みであり、観光の力の源です。

今後はこれを更に地域での展開につなげ、地域の皆さんがおもてなしの心と地域への愛情と誇りを持って、来訪者を迎え入れられるような取り組みを支援します。

5 魅力ある町並みー平常時の賑わいに向けて

瀬戸らしさの感じられる町並みを整備することによって、市民の誇りの醸成や観光資源としての価値を高めます。

(1) ストーリー（物語）性のある観光ルートづくり

中心部にある瀬戸川沿いやその周辺地域は、やきもののまちの象徴的な景観を形成しており、来訪者が瀬戸らしい風景や文化に触れながらまちめぐりを楽しんでいただけるよう、ストーリーやテーマ性を持ったコースの設定、散策路の整備を行います。

(2) 観光・文化施設の魅力向上

観光・文化施設間における情報共有や各施設の特徴・機能を活かした事業連携を図ることにより魅力を高め、リピーターやファンの増加に努めます。

(3) 魅力ある町並みの形成

これまで進めてきた「陶の路」に加え、市内に残る歴史的・文化的価値の高い建築物等を活かした町並み空間を整備することによって、沿線の空き家や空き店舗の観光活用（飲食店・ギャラリー等）、ツクリテ支援によるアトリエ活用を促進し、既存商業施設や観光・文化施設、ものづくり体験を組み合わせることで、まちの魅力を高め、経済の活性化につなげます。